

# 翻刻 千島異聞

校訂 栗原茂幸

## 凡例

- 一 底本には、天理大学附属天理図書館所蔵の「千島異聞」を用いた。
- 二 底本には、新たな段落・事項へ移るごとに、○の記号を用い必ずしも改行はしていない。翻刻に際しては二行割注の場合をのぞき改行した。文章の配列順および本文と二行割注の割り振りは、原則として底本にしたがった。
- 三 翻刻に際しては、人名以外では現在通行の字体に替え、新字体のある漢字はそれを用いた。
- 四 底本は、句読点を用いておらず、翻刻もこれにしたがった。
  - 1 拗音・濁音・半濁音の区別、送り仮名の有無、ルビ、傍注は、底本にしたがった。
  - 2 固有名詞をのぞくカタカナは、平仮名になおした。固有名詞（人名・地名・国名）については、底本の表記をそのまま用い、他本との校合を省いたところがある。
  - 3 底本の欠字は□で示した。
  - 4 底本の二行割注は小字とせず、〈 〉で括った。
  - 5 校訂者による注記（傍注も含め）には〔 〕を施した。
- 五 底本には丁付はないが、検索の便のために「」の印をつけ、（三才）（四ウ）等と傍書した。オは表、ウは裏である。
- 六 次の一五の写本により校合した。書名と略号は次のとおりである。

無窮会図書館所蔵本……………	[無]
東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本……………	[狩]
市立函館図書館所蔵本……………	[函]
内閣文庫(修)所蔵本……………	[修]
北海道立文書館所蔵本……………	[北]
国会図書館所蔵本……………	[国]
内閣文庫(外)所蔵本……………	[外]
尊経閣所蔵本……………	[尊]
宮内庁書陵部所蔵本……………	[宮]
京都大学附属図書館所蔵本……………	[京]
東京大学総合図書館所蔵本……………	[東]
神宮文庫所蔵本……………	[神]
尊経閣所蔵本(文化二年まで記載のあるもの)……………	[②]
彰考館所蔵本……………	[彰]
箕作阮甫による写本(国会図書館憲政資料室寄託)……………	[箕]

東京大学総合図書館所蔵本と神宮文庫所蔵本は脱落が多く文章の配列も他本と著しく異なるので、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本・市立函館図書館所蔵本・内閣文庫(修)所蔵本(これら三本は「無」「北」と同系統の写本である。解題参照)とともに、他本に該当するものがない時にのみ用いた。

七 校異の方針はできるだけ底本を尊重することを基本とし、他本を対校に用いた。底本の誤写・誤脱と考えられる箇所は校訂し、底本の欠けた(と思われる)箇所は補い、それぞれ注記した。ただし、底本における書名の「職方外記」「坤輿外記」は「職方外紀」「坤輿外紀」になおして用いた。なお、あくまでも参考として他本を注記したところもある。さらに、校訂の際の写本・刊本を参照した。

- 泰西輿地図説 青史社、一九八二年
- 魯西亜本紀略 写本、国会図書館所蔵本
- 蝦夷拾遺 大友喜作編『北門叢書第一冊』国書刊行会、復刊、一九七二年
- 魯西亜志 岸上操編『日本文庫第五篇』博文館、一八九一年
- 訂正増訳采覧異言 『訂正増訳采覧異言上』青史社、一九七九年

辺要分界図考

『近藤正斎全集第一卷』国書刊行会、一九〇五年

蝦夷草紙

大友喜作篇『北門叢書第一冊』国書刊行会、復刊、一九七二年

醉古筆記

『魯齊亜異舟来渡略』、写本、彰考館所蔵本

本多氏策論蝦夷拾遺

『近世社会経済学説大系一 本多利明集』誠文堂、一九三五年

これらの刊本・写本により校訂をおこない、「」で傍注したところもある。

注記の仕方は次のとおりである。

底本を採用した場合は、他本による校異を注に記した。( )内はその典拠である。他本を採用した場合は、( )で典拠を示し、最後に底本を注記した。底本に該当箇所がない場合は「なし」と記した。なお、校異においては諸本間の表記の違いも区別した。

校異のうち、読みや意味が同じで漢字表記だけが違うもの(島|嶋、所|処、唯|只、頃|比、始|初、有|在、船|舟、是|此、盛|昌、年|歳、簡|翰、赴|趣、受|請、又|亦、掛|懸、請|乞、使|遣、等|杯、義|儀、見|看、開|啓、立|建、物|者、服|伏、一|壹、境|界、云|曰、交|接、制|製、作|造、移|徙、総|惣、港|湊、双|並、送|贈、尽|悉、以|已、虎|席、恐|畏、小|少、輔|補、即|則、練|鍊、条|條、匹|疋、究|窮、打|伐、我|吾、依|仍、尚|猶、内|中、起|興、付|附、二|貳、偕|扱、仮令|縦、共|具、供、斗|許|計、等)、かなと漢字と表記だけが違うもの、および、他本が明白に間違っていると解るもの、は注記しなかった。国名に関わる表記の違い(漢字とカタカナ)も注記しなかったが、和蘭|紅毛、和蘭人|紅毛夷、と、夷人|異人は意味の差を認めて注記した。また、底本では漢文(白文)、他本ではその書き下し文となっているもの、も注記しなかった。

八 翻刻にあたり、天理大学附属天理図書館から「天理大学附属天理図書館本翻刻第五一七号」として掲載許可をいただいた。また、(財)

水府明德会より彰考館所蔵本の利用許可をいただいた。その他の写本もそれぞれの所蔵機関より写真撮影の許可をいただいた。この場を借りて深く感謝します。

千嶋異聞

蝦夷の千島は陸奥の東北にあたり□神州の鬼門の方位にして海を隔て、は西方より東北まで皆旧の韃靼の地なり古へ□天照太神四海に照臨まし〜てより□聖子神孫朝政を修明しよにも不庭を征し給ひしかは□皇太神の祝詞にも狭き国は広く険しき国は平けく遠き国は八十綱打かけて引寄する事の如くと云へるか如く四方風靡して西は三韓を降服せしめ府を任那に置て是を統制し《任那は今朝鮮の地に属す任那の府は今の長崎などの如く出張して治しなり》東は奥羽越等の地に蝦夷充斥せしを『<sup>(二)</sup>世々に征伐し給ひ将帥たるもの皆其人を得て豊城入彦命日本武尊等の人々次第に兇徒を静めしかは東北の地に荒き波風もなかりしを□天智天皇の御時に至りては阿部比羅夫をして渡り島の蝦夷までも悉く伐平け《渡り島といふは即ち今の蝦夷地なり》後方羊蹄に政所を置て《今西蝦夷地にシリベツといふ地あり即ち古のシリベシ也といふ》肅慎国をも討從へしかは肅慎渤海等の如

方…北(東神)  
太…大(国外箕)  
庭…底(無国)、屈(外)  
太…大(外)  
険…峻(国外)  
長崎…長崎奉行(尊宮)  
等…田村丸等(彰)、田村磨等(②箕)、田村磨(東)  
渡(無国外尊宮京②)、度  
渡(無北国外尊宮京②)、度  
地…の地(箕)  
置…建(無北国外尊宮京②)彰箕)  
地…の地(箕)

き海外までもしは〜朝貢せり《肅慎渤海等は何れも蝦夷の西にあたりて即ち今の満州の地にある国なり》其後公卿縉紳日々に宴安に溺れ朝政衰へて遠人至らざる事歳久しく其間には海外の諸国にもさま〜の变革ありて中にも『女真国と云はもと肅慎と同種なりしか後には強大になりて□後一条帝の御時にあたりて戦艦を發して壹岐対馬を陥れ太宰府までも寇乱せしかとも賊は何れの国より襲来れりと云事をしりたるものなく高麗の牒状によりて始て女真なりといふ事を知れり眼前に辺境を侵掠せられながら其寇の主名もしらざるほとなれば王化の四表に被る事なとは思ひもよらずさて女真国は是より後百年にして契丹を打滅し宋の汴京を陥れ宋の半国を奪取れり又此後百余年を経て蒙古強盛になりて金を滅し《金は即ち女真なり》遂に宋をも打『滅し其勢に乗して弘安四年十万の師を起して築紫に入寇す□主上もあまねく□天地地祇に祈給ひ太上天皇はかたしけなくも玉体を以て国難に代らせ給はんと□太神宮に祈請し給ふしかのみならず時の執権北条時宗の

海外…海外の国々(②彰箕)  
安…楽(国外)  
に…等(外)  
れり…れる(無北外京②)、りし(彰箕)  
の…の(彰箕)  
く…し(東神)  
辺…遠(無事)…、(外)  
に…へ(東神)  
祇(無北国外尊宮②)彰箕、極  
は…も(函)  
太…大(箕)

処置もまた其宜しきを得て蒙古の使臣の首を  
芟天下の兵を募て蒙古まで逆寄せんとせしか  
寄…寄に（無）

は天下の武士勇氣百倍して強寇をも拒退けし  
のみならず颶風起りて賊兵悉く覆没せり此後

又三百余年にして豊臣氏兵を朝鮮に輝かせ  
しか其比滿清既に強盛にして間もなく朝鮮を  
か…かは（無北国外京②）

も攻降し遂に明をも滅した<sup>（二ウ）</sup>り契丹女真蒙古  
なるに…なり（外）

滿洲等何れも蝦夷の西僅に一水を隔たる地な  
るにかゝるさまくの変故ありし事も兵乱  
故…改（国外）、攻（無北）

の世には内地のみ多事なれば奥羽の人々とい  
へとも其来由を知るものなし蠣崎氏など松前  
世（無北国外尊宮②彰箕、  
書  
のみ…も（彰箕）

に城壁を築き蝦夷の地を領せしかとも千島の  
奥の音つれば絶て中土に聞え候事もなかりし  
壁…壘（②彰箕）  
え（無）、へ  
候…し（尊宮②彰箕）

に近き比あやしき夷人等多くかの島々に渡り  
来て島夷を誑しおのれか国に属従せしめ次第  
渡…相渡（東神）  
夷…異（箕）

く松前の地方に近よりぬと聞ゆ其夷人の  
本国をラロシヤと云て西北極遠の地に在其国  
張…強（無国外②箕）

古は小国なりしか漸々に張大になりて近国を  
蚕食し韃靼の地を併せ得たる<sup>（三オ）</sup>に及ては其地  
勢既に蝦夷の千島に隣りて千嶋をも大半併吞

せりされは其消息もいかで中土に聞へさらむ  
やこれによりて其見聞する所を其繁を去り其  
り…つ（外）

簡なるを挙て大略を記す事左のことし  
を記す…記する（箕）

ヲロシヤ近世に至りて諸国を兼併し殊に近き  
比雪際亜の地を併せ得しより其広大なる事世  
界に双ひなし其地南はトルコに接し北は雪際

亜西はポロニヤに隣り東はシベリの地より□  
神州及び滿清と界を接へ其幅員本国は東西八  
清…州（国外）  
へ…す（彰）

百里南北五百里《此里数泰西輿地図説に拠  
る里程は何れも□神州の里法を以書す下倣  
北…北は（東神）  
五百…五百五十（②彰箕）

之》近來併得たる止白里の地南北六百里東西  
一千四百里程其封界本国をは赤白黒の三部に  
程…数（無北外京）  
近來併得たる止白里の地

分つペテルの時<sup>（三ウ）</sup>より三部を合て単にロシヤ  
と称す又分て五部とす其内府県を建酋長を置  
（の地、なし（箕））南北  
六百里東西一千四百里程

く所十二所止白里の地はトボルスキに郡県を  
建且夫々に酋帥を置て治しむ其風土は地域広  
封（無北国外尊宮京②）、  
（②彰箕、なし）

大なる故肥瘦も寒暖も一様ならず西方最豊饒  
なり米穀を出すの地凡二十州通国の糧に供す  
分  
つ…也（②）  
建…定（彰箕）

るのみならず多く近隣諸国に輸す北方は甚卑  
湿にして極て寒し野獸極て夥し土人漁獵を事  
酋帥（北国尊彰箕、首師  
（②）、師

とすシヘリの地其南方并に西方は頗る肥饒也  
北方及び東北は礮礮不毛なり是亦漁獵を業と  
の（無北外尊宮京②彰箕）、  
西…西の（狩）  
亦…所（狩）

す其君古はホルスト《將軍の事なり》と称し  
後カサルと成《又ケイセルと云も是に同し  
漁獵を業…漁業を事（国  
外）  
後…後に（②箕）

帝と云か如き尊称なりと云翻訳家は帝〔四オ〕と『いふ事は王より一上等なるを以て仮称する也其実は帝の字の義と異なり』其都城両所にあり何れも雄壮にしてモスコウの城は西洋

と（無北国外尊宮京②）、を

諸国第一の大城なり周囲十余里其内を四つに分ち各石垣を築き溝をほり皆赤き石にて砌成

し三層の城楼を建並へ溝をは煉土にて築かた

めたりペテルスベルグの城はペテルの建たる

都にしてロシヤ国第一の宏麗繁盛の地なり城

の広さ方二里許ハガと云河の内に三つの島を

合せて築きたり総石垣の高さ三丈余周りに鉄

襦銅の大銃を隙なく列ね湧楼飛閣美麗を極め

大門の上にペテルの像を安置す其国中の人恭

敬にして勇壮果敢事にのぞみて〔四ウ〕動せず君に

忠あり闘を好み事に死するの風あり《忠君の

事は西域聞見録に拗好闘は龍沙紀略に拗〔ママ〕○

按するに職方外紀に俗最澆凡欲貿易須仮託外

邦商賈方取信国人若言本土則逆其詐矣と云又

其歴世紀事紀する所を以見るに弑逆争乱の事

枚挙するにたへす讒姦詐偽をなす悪風俗なる

事歴然たりされとも是は慶長の比かの国革命

せし其以前の事にして外紀もまた元和中の書

紀事…紀事に（箕）  
に…にも（無北国外尊宮京  
②）

なれば革命後次第に更張してペーテル等の時  
に至て国民を化導してより其悪風も少しく改  
りしにやされとも古来の習俗尽くは改らざる  
と見へて近世までも詐偽の跡も間々聞及り』

く…つ、（外）  
ざる…す（箕）  
り…ひし（東神）

常に閑居事なきを不好他国に行事を執らし

むる者の如きは篤実至誠死に至るまで変ざる

者を撰用六十余年異邦を編歴して猶不帰もの

有其事を不遂はやます其事を成得たるものは

尤重く挙用ゆ諸国諸嶋に行て其地理を知守護

なき所を徇〔五オ〕れは直に其地の『守護職にも任す

又守護ある国に入て交易をなし有無を通する

も功になりて賞を受く西洋諸国ロシヤと交易

するものイキリスを第一とす其交易の法も他

国と異也其次は紅毛等也満清の交易も是又夥

し其他キリムハルシヤ等の互市も利を得る事

広大なり《諸国諸島以下は蝦夷拾遺に拗○夷

輩の西洋諸国の事を記せる書にも夷教の会に

入たるもの、事を挙げて有化人而欲及天下』

其衣服の制古代よりロシヤ国俗の服便利なら

すとて悉く改てセルマニヤの服を用ゆ《其衣

服以下はカムサスカ風説考に拗》其教法は

永正四年《自称千五百年》より厄力西亜キリキスの

化…他（外）  
ロシヤ…ロシヤの（彰箕）  
と…し（国外）  
説（尊宮彰箕）、俗

法を奉せしかペーテル改て羅馬の法を奉ず其  
か…なり (外)

習業は算数書法を専とすペーテル幣札<sup>(五ウ)</sup>を厚

くして西洋諸国有名の学士を迎学校を所々に

建生徒を教しむ諸国の典籍をも集め国語に訳

して刊行せしむ又庫中の書二千部の中より採

摭して百芸究理の書を編す又百工の作院有て

其業を習しむ学校壮麗いはんかたなし其学四

科に分つ星学史書学窮理学度数学也是と作院

と両学校の費用合て毎年五万三千二百九十八

ルウベルスなり《本注云金銭の名目方等未詳

大抵金一両ほとに当る》是に依て學術巧芸其

奥妙を得る者日々に盛也又へテルスベルクの

学校にも教科《教法を守る事を主る》治科

《政事に習ふ事を主る》医科《療治を主る》

道科《教化をおこす事を主る》の四科を分ち

日夜<sup>(六オ)</sup> 励精研究せしむ寛保二年に述作の書目

を点検するに医科道科の書一万四千百八十七

卷国事を記たる書二百八十二卷なり其刑罰極

て厳なり盗と女の姦せると又私に別国に入者

とは謀故闕誤を問はず皆斧を以て刺殺す其女

主の幸するものあれば或は期年或は数月にし

て是を殺す《刑罰以下聞見録》其軍制は大凡

和蘭及イギリスの法に因て是を修正す《軍制

以下歴世紀事》其王の隨身の兵常に三十万

也女王アナ教場を設て軍士を錬り又水軍はペ

テルの時オ、ステゼー《雪際亜の海湾○歴世

紀事作北高海》に七十二の戦艦を作り第一等

の船九隻每船軍卒五百《九隻通計四千五百

人》鳥銃六十《五百四十<sup>(六ウ)</sup>挺》第二等の船二

十隻每船軍士三百六十《七千二百人》銃五十

《一千挺》第三等の船五隻每船軍士二百五十

《千二百五十人》銃四十一《二百五挺》第四

等の船十九隻每船軍士一百八十《二千八百二

十人》銃三十《五百七十》第五等の船九隻每

船軍士七十二《六百四十八人》銃二十四《二

百十六挺》火船四隻快船十八隻捕盜船百隻合

せて軍士二万八千鳥銃二千五百是を一隊とす

専ら船を造る事をなす故ペテルスベルグ《ヒ

ンランドの海湾に臨むの地》アルカンゲル

《白海に臨むの地》に多くの船匠をあつめ夥

しく船を造らしむ《歴世紀事にロシアの人も

と水戦に拙しペテル會て北高海にて軍士をし

て水戦を習練せしむといふを以て見れば此以

前より戦艦はあれとも戦法拙きゆへ新たに戦

り…る (無北国外尊宮京②

彰箕)

せ (無北国外尊宮②彰箕、

なし

いふ…いふ事 (国外)

た (無北国外尊宮京②彰

箕、き





也その教を篤信せるもの、躬行既にかくの篤：尊（無北外②彰箕）

如し其始め正からず況や邪教は陽に君父を尊て陰に君父を蔑如する左道なれば此後逆乱の相続きたるも宜ならずや

オロトミル死す諸子分争して国乱る諸子の内にヤロスラウなるものロシヤを一統すヤロスラウ死して諸子又分争す其孫ヲロトミルテテウエエエラ一統す死後其子ウセラルト嗣くウセラルト死して諸子又相争ふ又西韃<sup>（九オ）</sup>韃のためにしはく撃破らるる《韃韃は即ち蒙古国也》蒙古国号を元と改む此ころは即ち元太祖の時に当れり韃韃の強盛なる事知へし》セオルジウスセオルウイスよりゼオルシウスラメトリ

相…とも（国外）、共（無北尊宮京②）  
元…元の（箕）  
国也蒙古②、なり蒙古（彰箕）、なし

オウイス二世を経て争乱やます兄弟叔姪相殺傷し且四隣のために困しめらるる、事百四十余年に及へり〔平出〕後嵯峨天皇御宇国王タニイルロマノウイスコヲニンキの爵を受始てモスコウを居城とす《モスコウを居城とする事狄志には□土御門天皇御宇とす増訳には伝信紀事を引て□後醍醐天皇の御宇とす》  
○□後二条天皇御宇国王タニイルアレキサントロウイス始てコロオト《大也》ヘルトグ

相…とも（国外）、共（無北尊宮京②）  
天…天皇の（無北外②）  
天…天皇の（無北外②）

《五等爵の公の如し》と称す

○□後土御門天皇御宇<sup>（九ウ）</sup>王ヨハンネスバシリデス始てモスコヒヤの周辺に墻壁を築く初めロシヤ兄弟叔姪交争ひ賊臣叛乱して国中不穩且西韃等諸国より窘迫せられ国危かりしか是に至て内政を修め隣好を結ぶノホゴロト先にリトニヤの為に奪る然るに厄勒西法の長此地に在て土人は是を信す遂に悉くロシヤに帰す又西韃モスクワに入しより彼人留住する者多し然るに皆宗法に化す寺觀を建るに依て韃人を徙し此地に復し尚其近隣の韃人も帰化し其地又ロシヤに併するもの多し此王死後其国猶強し

天…天皇の（無北外）  
王…主②  
く…き（外）  
等…等の（無北、韃等の（国外）  
隣（無北国外尊宮京②彰箕）、なし  
る…はれ（外）  
韃…韃韃（外）  
法…徒②彰箕  
る…に…（彰）  
に…を（無北国外尊宮京）  
し…する②箕、す（無北外尊宮京彰）

○永正八年《八年はカムサスカ風説考》国王バシリウスイハノウイス邏馬に觀して<sup>（十オ）</sup>ケイセルの爵を受  
○天正中西韃の地カサンアストラカンを取其余北高海辺の諸州を取威巴尔西亜に及へり《本注曰ハルシヤは堅固にして侵へからざる国也》又キリムセタルタリヤとロシヤの界に長城を築《清の長城のとし》  
○十五年西韃の属国トホルスキを打破りシベ

に…と②  
觀し（国外）、親み  
取…取《狄志云殷富の地なり》  
る…るの（彰箕）  
韃…韃韃②

リの地を略す《世伝本注曰今のシヘリに比す  
れは十分の四也狄志年異也○坤輿外紀タルタ  
人性好勇以病没為辱》明天竺に交易の商賈ト  
ホルスキに会し防寇軍を以護送す甚殷富の地  
也《狄志》

○是後國中又大に乱れ累年やますホロニヤ雪  
際亜等是に乗して互に攻入其地を争取りホロ  
ニヤ王の子を以ロシヤ王とす然る処ホロニヤ  
は其法教異なるを以モスコウの人と争論し動  
もすれば鬭争に至ロシヤの大親戚其王<sup>(十)</sup>の  
正胤を求めとも不得乃邏馬に請て法堂の主ミ  
カアルベトロウイスロマノフ《ロシヤ王の女  
の所生也》を以て王とす時に慶長十八年也王  
ホロニヤの界をかため都邑を修理し邏馬と好  
を結ふ

○雪際亜ホロニヤとロシヤを伐んとはかる  
○十九年ロシヤよりアンケリヤヲランタに使  
を遣す《本注云地勢を察するに雪際亜に備る  
為なるへし》  
○元和元年雪際亜ロシヤを伐明年ホロニヤ二  
国を和平せしむ

○王類敗せる国を受力を竭して国を治め民を

性(無北国外宮京②彰箕)、  
姓(尊宮②彰箕)、防禦  
防(国外宮②彰箕)、穫

取：た(②彰箕)  
王の子を以ロシヤ王とす然  
る処ホロニヤは其法教(法  
教、なし(東))異(異：  
実(②彰箕)なるを以モ  
スコウ(東神②彰箕)、な  
し)

安んせんとするを事として安処せず時にホロ  
ニヤ雪際亜トルコ西韃皆其地を併んとする故  
疆界を嚴にするを急務とす  
○法教師を遣してサモエデン<sup>(十一)</sup>《氷海の浜》  
を徇ふ

安んせんとするを事(無北  
国外)、安ん(尊宮)、安ん  
す日(②箕)、安んとす日  
(彰)、安んする(東神)、  
安んとする  
徇(国宮②彰箕)、殉

○寛永四年ホロニヤよりロシヤの界を侵し且  
彼国の法師を辺境に遣し人民を誘す

○九年スモレンスコに置たる十万の兵ホロニ  
ヤの為に数々敗らる西韃是に乗して境を侵す

○十年法主王に説て云国君は博愛の心を以自  
持すへし凶器を以威を示すは仁術を以徳を施  
にしかすと王是に依て専和平を事とす

器(無北国外宮京②彰箕)、  
悪  
を(国外)、と

○十一年ホロニヤを平く

○ホルステイン《ゼルマニヤの属国》使を遣  
しハルシヤのロシヤと通好を請《世伝》

○ロシヤの部落蘭阿尔清に朝す《三朝実録》  
蘭：桑(②彰箕)

按ロシヤ清と通する事此に至りて始て書に  
見ゆ<sup>(十一)</sup>  
ヤ：ヤの(外)

○十六年満州の雅克薩の地にロシヤより城を  
築て索倫打虎尔を侵擾するによりて此歳清の  
戍兵諾尼江に移駐す

十六：寛永十六(②彰箕)  
擾：掠(②箕)  
駐(国尊宮京②彰箕)、駆

○正保元年イルクツキ《東海に浜す》を併す

シペリ三州の内尤広大の地也城を築大銃を設  
清と交易す《狄志》

按此時西荒に強国多く輒く志を得かたきに

よりに韃靼新に清の為に敗られて敗喪せし  
虚に乘し此地を併得しなるへし昔秦山東の

諸侯と争しか共山東猶強かりければ先西蜀

を開き地を広め兵を強くして其後山東へ打

て出終に志を得山東の<sup>(十二オ)</sup>諸国を打亡たり孔

明も魏と争て志を得さりしか先南蛮を撃地

を広め兵食を足して後打出ければ魏人朝野

恐懼関中響震せり今ロシヤも此術を用しに

やシペリの地既に手に入し後は西方諸蕃

これと抗する事あたはさりしも亦宜なら

すや

○二年王死国民父を喪ふか如し子カサアレ

ウイスアキシスミカエロウイス立

○慶安元年三人の姦臣を誅す

○承応二年勿羅尼亞雪際亜二国を撃二国和を

請《二国ロシヤの辺を侵す故なり》

○コサツケンを撃コサツケン罪を謝し和を請

《世伝》

○清副都統《官名》を以寧古塔《ロシヤ界の

地》を守

○三年<sup>(十二ウ)</sup>清黒龍江のロシヤを伐《是先にイル

クツキに城を築き居しものなるへし》

○明暦元年使を清に遣し方物を貢す

○二年又使を遣す

○万治三年又遣す《並図考》○会典に貿易之期

以子辰申年と云然るに明暦二年は申年也万治

三年は子年也然れば皆交易の為なるへし○狄

志には万治三年始て通すといふ《此事を三朝

事略に曰自称大汗語多不遜諸王群臣議宜逐其

使仍却貢物得旨外邦從化宜加涵容仍察収貢物

但不必遣使報書

○寛文六年セリンギンスキ《イルクツキに属

す》に城郭を築き清韃靼と疆を固め多く倉庫

火薬及び器械の庫を建《狄志》

○七年西韃ウクライネを侵《ロシヤの地》都

尔格ウクライネを伐又ホロニヤのウルマンを

取西韃のキリメヤを伐モスコウに向ん<sup>(十三オ)</sup>とす

ロシヤこれを拒事三年未利あらず

○八年の比韃靼の為にレサンを打破らる

○十年大に軍を發てこれを伐是後五年の間口

シヤトルココサツケン西韃等互に相攻

方：万（無国外）

又：に（無北外京②）

並：再（無北国外尊宮京

②）

なるへし：来るならん（彰

箕）

貢（②箕）、工

遣（無北国外京箕）、遣

倉庫：倉庫火庫（外）

倉庫：倉庫火庫（外）

倉庫：倉庫火庫（外）

倉庫：倉庫火庫（外）

倉庫：倉庫火庫（外）

韃靼：北韃靼（無北国外尊

宮京②）

打破らる：敗る（国）、打

破る（無北尊宮京②）、破

る（外）

○延宝三年王死此王稀世の才徳あり常に三愛言を以国人に示す《博く士民を愛し法令に従ふものを愛し親子兄弟夫婦朋友相和する者を愛す》又病喪貧鰥寡孤独を救済す勇ありて専ら干戈を動さず外国及ロシアの軍師兵士を招て武学校を置戦を習し法教を教ゆ近隣是を畏る子フドルアレキセイイス立《○通覧補遺に寛文六年とす》

干戈を(を、なし(東神)  
(東神箕)、なし

○四年使を清に遣す《是も辰年なり交易の爲なるへし》是より先清の地雅克薩に城を築き索倫達虎尔等を侵す清是を禁すれとも遷延し<sup>(十三ウ)</sup>て不去是年清寧古塔將軍を移して吉林烏喇に鎮す《図考》

達…連(②)

○王立てより自ら大軍を卒てトルコを伐ホロニヤ是に乗して又ロシアを伐しか大に敗れて和を乞国王又西韃を伐西韃和を乞又トルコと戦て和平す国王軍事に劬勞し寧処せざる事五年四方和平するを以将士の功を賞す又モスコウの家屋を悉瓦屋瓦墻とす《世伝》  
○八年王死す子なし弟イハン病ありて立へからす少弟ペテルアキシウイス立是年天和元年なり《世伝》○通覧補に天和三年フー

ら…分(尊)  
しか大に敗れ(れ、なし  
(箕)て和を乞国王又西  
韃を伐(彰箕)、なし  
屋…居(東神)  
王(国外②彰箕)、なし

テル死叔父イハン立病在てへイテルに譲るとす

○天和二年清又渾城《ロシア境》を修明年黒龍江將軍を設

○貞享元年清ロシアを伐ロシア退て雅克薩を保す

○三年清破ロシア墨爾根城を建《図考》○トルコ界を侵国王是を拒辺境の戎役及其地の士民の家毎に金帛を与て軍陣の備をなす時年十五

○ホロニヤ又界を侵すロシア是を<sup>(十四オ)</sup>撃て大に勝キオウスモレンスコセハリイン数州を取

《世伝》

○元禄二年清雅克薩城を囲ロシア和を乞て退く清石を立て界とす《図考》ロシアにてもモンゴル《即蒙古》の界に城を築く《狄志即ち寛文六年築たるなれば此時は修したる也即ちネルトシンスキなるへし》ネルシンスキにも城を築き清との界を固め此所に関を置て交札の使を通す《図考に引蛮書》

按聞見録に康熙年間始通遣其俊秀入我国学訳業受四子書而去といへるは此時なるへし

死…の(無北国外尊宮京  
②)  
病在(外尊宮京②、病有  
(無北彰)、病ひ有(国箕)、  
病死

す…也(箕)  
天和(天和、なし(②彰  
箕)(二年清又(又…人  
(②彰箕)渾城《ロシア  
境》を修明年黒龍江將軍を  
設○貞享元年清ロシアを伐  
ロシア退て雅克薩を保す○  
三年清破ロシア(破ロシア  
…ロシアを破(東神)墨  
(墨…黒(②)爾根城  
(城、なし(②)を建  
《図考》○(東神②彰箕、  
貞享三年

王…主(北)  
に(無北国外尊宮京②彰  
箕)、なし  
此時は(は、なし(箕)  
修したる也(也…にや  
(彰)即ち(②彰箕)、此  
時は修復かし(外)、此時  
は(宮)、此時は修したる  
にや(東神)、此時は修し  
た

又按此時シヘリ地人民少かりしか共猶清の

地を侵擾す其志悪むへし漸長すへからすこ

れによりて清(十四ウ)は大国なれとも敢てこれを

慢らす数々伐て遂に是を退け城堡を所々に

築て是を守る戒る所を知れりと云へし猶其

図を見て守備の勢を想ふへし依て其略図を

左に載《図可裁補》

○三年シヘリの西際ワルガテリヤに城を築

《世伝》

○四年清白都訥《ロシヤ界》に副都統を設

○五年清齊々哈尔滨を建《ロシヤ界》

○六年清黒龍江城を建《ロシヤ界》是歳使を

清に遣す清直路を開て嘉峪関より其国に至ら

しむ《図考》

按世伝に古来シベリ山川多く崎嶇險阻なる

故清に往者六年を経て至りしをペテル峻險

を開き順路をなし(十五オ)加之舟行の便に資て尤

捷徑を得今はモスクワより四月にして清の

北京に至事を得と云は此事なるへし

○九年トルコの地アソツフを取是地甚使用の

地諸州咽喉の場なり故にロシヤよりも先年よ

此時(無北国外尊②彰箕)、  
此書時

シヘリシヘリの(無北外

尊宮京②)

共は(②彰箕

援掠(国外

志意(外)

を(東神

数散(東神

図可裁補、図可補(無尊

宮)、図略す(箕、図(東

神)

四年(②彰箕)、なし

都(②彰箕、湖

界の界(無北外②)

界の界(外②)

界の界(外②)

峪(②彰箕、銘

き…て(②)

り度々攻けるに終に其都城を奪取れり《輿地

図説》

○十年へテル平人の大工のまねして和蘭に行

大船を作る事習得是より大船を作覚たり《図

考引長崎古老所伝断牘》

○十一年トルコと西韃とを敗《世伝》

○是歳カムサツカを大半服従せしむ是古奥蝦

夷と称せし地也《本多利明か説に此地迄は古

は蝦夷の内にて松前氏の支配の地なりと云然

るに此地を取れて後百余年間是を不知して過

し也《此地本蝦夷クルムセの部落にして神州

の属嶋也蝦夷(十五ウ)云昔ヲキクルムイ《義経》サ

ル川の上に居しか後にホンル、カの国へ至と

云ボンル、カはカムサズカ入海の大港也ロシ

ヤ人改名つけてハストワアヒルスコイと云今

は砦壘を築海口の所々に大筒石火矢を備へ是

を守るクルムセは本イチセコツチャカムイと

て蝦夷地に居ける一種の夷人の末裔にして次

第に奥地へ移りラツコ島カムサツカ地方に往

て部落をなす其人物は蝦夷に異なる事なし髪

眼も黒し今皆ロシヤ風俗となる彼輩の此辺を

蚕食せしは東砂葛記并ロシヤ志に明曆寛文の

和蘭…紅毛(彰箕)

事…事を(無北国外尊宮

断…の(国外、尺(②)

敗…攻(無北国外尊宮京

②)

利(無北国②彰箕)、なし

説…一説(無

年…年の(外)

過…至(無北国外宮京②)、

在(彰箕)

鳴…辺(外)

ワ(無北尊京②彰箕)、ツ

比かロシア人テヲトツ漂着して巡見すと云又  
ロシア人イシユヨは慶安三年初<sup>(十六才)</sup>て見開と云  
是歳に至りて初て打従へしなり《図考》

守重曰カムサスカは本我蝦夷の種族也其地  
今ロシア北海の要地とす可嘆《風説考為正  
徳四年之事》

此地始は無人嶋也しか韃靼の内モンゴルと  
いふ国あり《即蒙古也》数百年前にカムサ  
スカへ人をまく《風説考》

○十二年トルコと和す《世伝》

○清人渾城の將軍を移して齊々哈尔城に鎮す  
《図考》

○十三年「ウラルガ」「ドン」二大河の間鑿  
通しへテスベルク《今の都也》より清トルコ  
イギリス和蘭ハルシヤ応帝亜等の諸国と交易  
す其利古に百倍す

○十五年雪際亜を伐インゲルマルラント  
<sup>(十六ウ)</sup>を取

按増訳に彼国一千七百年の比より蘇亦齊亜  
と戦を交へ其地を奪其將士を俘獲する事極  
て多し又ホロニヤの地を併する事甚広大な  
りと云も此よりの事なり然れとも本書年

地…津(東神)  
す…なる(東神)

カ(無北外宮②彰箕)、な  
し

人…又(②箕)、入(東)、  
大(神)

し…して(箕)  
和蘭…紅毛(彰箕)

此…此頃(無北国外尊宮京  
②彰箕)

曆異同有て何年と定かたし○風説考にシユ  
ウジヤの国 到…日(彰箕)

○十六年此地に新都を建へテルスベルグと名  
つく《並狄志世伝》地の利は勿論土木の美遠  
近双ものなしモスコウまでの間直路を開き里  
亭駅舎等往還の便宜悉備れり時に其治平なる  
を以民国王を称してハアテルデスハアデルラ  
ンツと云《生国の父と云義也》  
に…々(外)

○宝永元年雪際亜を破てレイフントを<sup>(十七才)</sup>取

○四年ホロニヤ雪際亜ロシアを伐んと謀

○五年雪際亜とホロニヤの地に戦

○六年雪際亜ホロニヤコサツケン三国ロシア

を伐ロシア拒て是を破遂にコサツケンを滅し  
てロシアの郡県とす《世伝》雪際亜ピユルト  
ワを併て其余兵并其擄掠せる士卒をシヘリに  
遣享保六年までの間多くハラハ《シヘリの  
地》等を併得たり《狄志》

按虜シペリの地を得しかとも曠漠にして人  
少し故に多く人を徙して蕃息せしむると見  
へたり又罪人をシペリに流すの類も亦其術  
なるへし《又八紘訳史阿魯索条に阿路索属  
国名昔白利牙其国有罪者放於此歳久成一大  
昔(彰箕)、なし

ロシアを伐んと謀○五年雪  
際亜とホロニヤの地に戦○  
六年雪際亜(②彰箕)、な  
し

国

○七年雪際亜を伐リホニヤエストランド等の諸州を取

○<sup>(十七ウ)</sup>正徳元年雪際亜トルコに説てロシヤを伐

しむペテル西方に事有を以て其妻をしてトルコを拒しむ苦戦する事三日指揮皆機に応すトルコ和を乞

○トルコと戦て大に勝利を失アソブ都城のみならず小韃靼の部皆トルコのために陥らるキ

リムの地もロシヤよりは是を奪ひ其トルコより建置く所の都城皆破却してロシヤより築きしか再ひトルコに帰す《輿地図説》

○三年雪際亜を破ヒシラントの諸州を取大泥亜フロイセン等諸国聘を通す《世伝》

○四年宝庫を建天産人巧の奇品異貨を収貯草木蟲魚各数百品に下たらす初ペテル元禄十一年より和蘭商人に囑して買得たるなり<sup>(十八オ)</sup>《狄志》

○五年再ひ軍を起しカムサスカは勿論其傍の島々迄打従へたり《狄志》

按オトルスキ猶服従せず時に拒しか年々に近隣服従するによりて今は賦税を出す事になりたりと云此比なるへし

皆(東神)、なし  
是を(②彰箕)、なし

○是歳寺観を興立し法官の位階を整へ声律管弦舞楽等を修し祭祀の儀節を盛にす新都に大学校を立フランスより博士を召て諸家の書籍を講せしむ《世伝》

○享保元年ペテル舟行して西方大泥亜和蘭アソブケリヤフロイセンフランス等の諸国を巡覽す遊行<sup>(十八ウ)</sup>して他国に在る事十六ヶ月にして帰

此後又ヲラシタフランスゼルマニヤホロニヤスエシヤを巡覽す皆彼諸国の政刑礼楽を検し或は諸術芸奇器等を審にし其学師工匠を召す《世伝》

○三年ヲネガ湖ラトガ湖の間十六七里ありしを今年より工を起して渠を穿是より十五年を経て成る《狄志》

○又此所よりムスコウへ二百十四里《里数追て考ふへし》車の通る程に直路を開く是歳落成す道幅十三間両側に並木を植一里程に柱を立二十四所に駅を置馬二十四匹を備て旅人に便す冬は雪車を用て二十四時《二昼二夜》に行土手蔵を作て洪水を防く

○五年是より先雪際亜強<sup>(十九オ)</sup>を持て諸国と戦しか近年連りにロシヤに破らる且大泥亜<sup>フロイセン</sup>漏生

数：程(彰箕)  
三：三四(②彰箕)  
程：毎(②彰箕)  
備：貸(宮)、借(無北外京②彰箕)

島：辺(外)  
に：々(無北国外尊宮京②彰箕)  
此比：此比の事(②彰箕)

ハノオヘル諸国又交々是を伐《ロシヤと好を通せし故なるへし》是年ロシヤ前取所のリホニヤエストラントインケルマンラントカレリア等の諸州永くロシヤの地とせんと約す

地：限（東神）

○ホロニヤ国乱て二十年に及ふベトル是を静む此に至て近隣諸国服従せざるものなし

○六年北高海の周辺を巡見して其里程を測り水陸の分界山河高深等を正して大に彼辺の地図を改正す自ら図を作て其説を述て刊本とし諸州の学校にこれを頒つ《世伝》

測り水陸の分界山河高深等  
を檢（檢、なし）(②箕)  
正して大に彼辺の地図を  
(②彰箕)、なし  
の（彰箕）、なし

○スウエニデンの属国カルガボリスカレリアの地ロシヤに属す《輿地図説》

○マンガフセをトボルスキに隸す《狄志》

○七年始てケイセルと称し<sup>(十九ウ)</sup>《世伝》○狄志に

始て：始て《本書》(②彰箕)

六年とす《トルコと号を相争》《狄志》

○八年カタリネンベルク《シヘリの地》を置

是後十四年を経て成《狄志》

是：其(②彰箕)

○九年初めペテル西荒の諸国より有名の学士

を迎へモスコウキラウペテルスベルクに学校を立多く書肆を設け諸国典籍を集め生徒を教へしが是歳雪際亞フランスより有名の者を迎業を習しめんとす

国：国の（東神）  
めんとす：《狄志風説考参  
取》（東神）

○センスコイに城を築清と境を固め交易して大利を得

○是歳カヒタン某カムサスカ辺の嶋に往て是を領す蝦夷名字を請に依てサントラロウレンスト名を与ふ《図考引蛮書狄志に享保十三年ベリング始てシントラウレンスに至》

年（無北国外）、なし

按図考初め虜蝦夷諸島に来る時蝦夷に語て曰我国<sup>(二十オ)</sup>の帝王は日月の尊か如し故に蝦夷

をチユカトノと云属島をチユフカと云チユフカとは日出処と云の義也又日月を指てチユフカムイと云チユフカカモイトノチユ

フトノ共に日出る処の人と云事也蝦夷は日域の属嶋なればなり古は□日域より隋国へ

書を送りて日出処と称したれば□日域をこそ日の本とも日出処とも称し奉るへき事なるに却て西北の日出に遠き国を日出処と称せしむる事其狡黠誠に悪むへし

事：義（東神）  
な（無北国外 尊宮京②）、  
た  
日の本：日本（国外）

○是歳ペテル死す其骨を銀の櫃に入て天主の寺に蔵め碑を立て功德を誦す此ペテル智謀深く大略有専ら民を安んし国を富す土功<sup>(二十ウ)</sup>を起して利を広め葡萄杯を植て民食を足し学校を

土：大（無北国外）  
利：高利（国外）



立て法教弘め兵を練て敵国を威す又古はロシヤを赤白黒の三部に分ちしに今併して単にロシヤと称し航海の法を訓練し多く戦艦を作て水軍を備ふ《図考に元禄十年和蘭に行て大船を造習ふ事を載》軍人の甲冑を停む大に諸蕃を切従へ近隣畏服せざるものなし《参取狄志世伝》○ペテル死を狄志に十年とす

法教…法教を（無北国外尊京②彰）、教法を（箕に…か（彰）今…合（彰）死…の死（無北国外）○（無北国外尊宮京②彰）、なし

○十七年に至りてペテルの肖像を作りてヒユルトワの戦に用ひし衣甲を着せ宝庫に納む《ロシヤ志》ペテルの妻カタリナアレキシイウナ嗣て立カタリナ初めより内政外防を輔け相將軍卒共皆帰服すヘテル死する時士卒皆国の父死たれとも国の母猶存せりと同音に号けり《世伝》

十七年…享保十七年（②彰箕、享保十七年（東神）ロシヤ志…狄志（彰箕）べ…○ペ（彰箕）

○十年船司加比丹三人《ベリング》「スパンベルグ」「ツキリコウ」をしてシヘリの図志を作しむ《狄志》

共皆…等（東神）け…せ（②）リン（彰箕）、ンシ

○ヘテルの業を継《狄志》学校を新都に建天文地理曆数等を学しむ《世伝》

院…法（②彰箕）

○「ナレイン」「トムスキ」「クスネスク」の三所トボルスキ《シベリの祖国》に属す《狄志》

祖国…船図（無北尊宮京②）、地図（国外）

○十一年清吉林烏喇に永吉州を設け寧古塔に参寧県を設白都訥に長寧県を設

都（②彰箕）、胡

○十二年カタリナ死ヘテルの子ペテルテテウエエデ立

○十三年（数字分空白）加比丹ベリング始て

シントラウレンス嶋に至《奥蝦夷の諸島》然

共人なき故其後は不至ベリングは多くの嶋々

を開きしのみならず東蕃の西辺北極六十度の

地を開たり《図考》《カラフト考》十四年ロシ

ヤ人サカリン島にて蛇を多く取又曰此島に後

にロシヤ人來居とロシヤ人イワノに聞と常矩

云又曰此島南北百里東西七三十里本より清に

属す其後ツキリコウなる者《是もベリンク

と共にシベリの図志を作者》東蕃の西辺六十

五度の地を開く

○十四年清参寧県を罷

○十五年王死ヘテルの姪女アンナイハンノウ

ナ立

○クバン本トルコの所属にてペテルの時よ

り手に余りしを強て服従せしむ《狄志》

○前年ヘテルスボルグの大学校を建るの議有

是歳是を建貴族の少年をして学しむ《世伝》

世伝…狄志（国外箕）

○（②彰箕）、なし  
ルコ（国彰箕）、コル

○是歳カムサスカの人口シヤに叛き程なく又従ふ夫より年々貢物を出す一人毎に獣皮一ツを貢すといふ《カムサスカ風説考引ゼヲガラーヒ》

○十六年ベテルベルグに教場を多く設て軍師を撰て操練せしむ《狄志》

○清トルコ二国使をロシアに遣す《世伝》

○カムサツカロシヤに敵対せしか程なく平く

《狄志図考作十五年》

○十七年ハルシヤと平く《世伝》

○ベテルの作り初めシヲネカよりラトカまでの渠成就す丁夫日々に二万四千人を用ゆ是より諸物運送<sup>(二十二オ)</sup>心のまゝ也土地の繁盛庶富言に不及近隣の諸蕃も皆其利に頼る

○小学校を建て幼童を教

○十八年ホロニヤの乱を平け其叛臣を討す

《世伝》

○エニセイスキ《シヘリの地》に府城を建武庫火薬庫有《狄志》

○二十年シベリ図成是より地の曲折明白に成

地を開き清カムサスカ等への路程も詳にて行

路も安穩也《狄志》

按図考《引荷蘭全世界地図書記》一の符号

の横文字の文に云此地図はイリス国閣老

○元文元年カタリネンベルグの府城成就《狄志》

○小韃靼及ひトルコと戦大に是を破亞蘇夫の城及ひ吉里模《小韃の地》の<sup>(二十二ウ)</sup>半部を奪ひ又トルコを破「ラクサカ」「ウーキン」「ブル

ン」等の諸州を取《世伝三年西韃を破是三州を取と云是と異也》其威大に震ふ《増訳引万国伝信紀事》

○初めアンナ□神州と清とに通路して二国の強弱虚実をも試み通船交易を謀へしとて船を

発せしむ此船カムサスカの南クリル《蝦夷》

に至此地にてロシア戌館の人若干を借て南に行一島に近づきしに嶋人是を防くロシア船中のクリルの人を以此所に來るの仔細を通す嶋

人初の卒爾なるを謝す又別島に至島人上陸せしめよく存恤す且此嶋沃土にして果木甚美なり依て是より□日本清に至交易の事を図る

《参考図考世伝》こゝに至てロシアの諸臣會議して曰<sup>(二十三オ)</sup>「今近隣悉帰服して実に宇内の太平の基を開り願は北アメリカ□日本清をも巡察

シベリ…シベリの(②彰

箕

ラ(無北国外彰)、デ

作…昨(国外)

の(外)、なし

ラ(無北国外尊宮京②箕、

州…所(北)

せんとて海舶を發す

○三年西韃を破世伝見合へしオクサコウキレブルン等諸州を取《世伝》

○西韃を破りキリムの地を悉く取トルコを破

モルタビヤ国を降し其威大に震ふ初めへテル

北高海にて水戦を習しアンナに至ても軍士を

勵して頻りに習熟せしめ遂に水陸ともに一の

如し是に依て今大に勝利を得たり《参取|伝信

紀事》

○四年異船陸奥安房の民に銀錢を与へて通た

り是を長崎滞留の和蘭人に問ふにムスコウビ

ヤの物也と答是去々年發せしロシヤ船なり

《船頭も同人なり此船奥州に来と図考に所引

の長崎古老の書に見えたり》

○西韃アソツフを二十三ウ撃んとすロシヤ水軍を發

して是に勝後遂に和平す

按にロシヤ志にアナの時水戦陸戦ともに其

法に熟鍊せしはトルコタルタ等の強敵と数

度交戦し黒海サバチセ海の大戦を経てより

其法を得たりし也然とも今年凱旋せし時再

ひ此海に我國の船をはさしと云しと見ゆ

是を以て考るに此時和平して是より後は

三年…三年《世伝見合へし》(京②)

熟…練(箕) 取…取増訳引(東神)

通…過(尊宮) 和蘭人…紅毛夷(彰箕)

船頭も同人なり(②彰箕)、なし え(狩)、なし

再び戦ふに不及との事ならんか

○雪際亜と和す「ホロニヤ」「トルコ」「ロラマ」西韃「フランス」「アンケリヤ」等諸国皆使を通す

○五年カムサスカカ城を築く是カムサスカ五城の一也

按點虜去年西方に志を得て今年又東方を經營す二十四セ其暫くも休息せざることかくのこ

とし

○是歳アンナ死アンナ丈夫の資有て能英雄を

御牧す〔数字分空白〕近隣悉く畏服して敢て

界を侵す事なし其甥イハンデデルテ立

○雪際亜ロシヤの界を侵

○是歳イハンデ死

○寛保元年へテルの女エリサベトペトロウナ

立

○邪法をカムサスカに弘む土人悉く帰依す

《世伝○狄志是歳カビタンベリンクス始てベ

リンクス島に至》

按狄志此事の下に又カムサスカの属島クル

リス諸嶋大者二十五小者不知数カムサスカ

に附近の島々はロシヤに従へとも遠く離し

再び(無北国外)、再(尊宮②)、なし

カ…カ(②)

其…其志(外)

雪際亜ロシヤの界を侵○是歳イハンデ死…雪際亜ロシヤの界を侵すことなしイハンデ死す(無北国外尊京②)

依(無北尊宮②彰)、伏

下…外(東神)

鳥々は各酋長有と見ゆ戎狄蝦夷を(二十四ウ)クルリ  
イスコイと云クルリスは即ち蝦夷也今此文  
を見る時は此時までは蝦夷の諸島悉くは併  
せられざりしと見へたり然に今蝦夷の属嶋  
はクナシリエトロフカラフトのみ也他の

は(外)、なし  
此(の) (箕)

鳥々はいつの間に併せられしにや又各属嶋  
を拏たる下に一大嶋其南の端を松前と云と  
有然は松前地続の蝦夷をも既に彼か属島の  
如く云なすと見へたり是漸を以蚕食するの  
術なるへし

各(右) (彰箕)  
の(外)、なし  
松前(松前の) (無)  
か(の) (彰箕)

○二年雪際垂を伐

○三年雪際垂和を乞

○宝曆三年(一説に延享元年と云今図考に  
従)南部佐井の民ロシヤに漂着し皆ロシヤに  
降るロシヤ是を扶持す其内利八郎と云者(二十五オ)日  
本通詞の聳と成勝右衛門はイルクツコイの  
有司と成其子は国王より名をつけて船師とす  
久介の子もロシヤ風の名を付て寛政四年ロシ  
ヤ聘使と共に松前へ来是に依てロシヤにいろ  
はの文字も伝はり(二十六オ)神州の土産人物風俗も略  
知れたり(醉古筆記に天明元年イシユ再来○  
三年南部漂流船主ベイタラレンセイイチヤと

右(無北国外) (彰箕)、な  
し  
師(無) (彰箕)、帥  
は(は) (彰)  
醉古筆記に天明元年イシユ  
再来○三年南部漂流船主ベ  
イタラレンセイイチヤと名  
を賜其兒十七歳七十人の船  
師となり当嶋に来る云々:  
延享(享) (彰箕)、宝  
元年陸奥北郡佐井商人竹内  
(内) (彰箕)、中) 徳兵  
衛直乗出帆十六人乗組ロシ

名を賜其兒十七歳七十人の船師となり当嶋に  
来る云々)

按分界図考曰ロシヤ(二十六オ)神州の事を詳にせし  
は是等の漂民より伝へしなるへし嘗て聞口  
シヤに於ては諸国の漂民は別に舎屋を設て廩  
俸を与て厚く撫恤し其風土言語文字まで尽  
く生徒をして講習せしむ故に万国の事通知  
せざる事なし蘭書ケンフルの如きは(二十五ウ)神州  
風土文字は勿論道里駈程京撰の名所江戸及  
ひ大城の事まで悉く図記して残す事なく又  
ロシヤ刻せし(二十六オ)神州地図にも諸大名衆の紋  
に至まで図す是皆其風習也寛政丙辰長崎に  
て紅毛守重に語てリユス国へ行し事有しに

ヤのイルコウツカ漂着其土  
に留る佐井勝右衛門ムスク  
(ク(カ) (東)) ワ城主に  
仕奥戸利八郎ヒヨトロ妹婿  
となる大間村長松宮古浦長  
作伊兵衛此五人今に存命○  
(○) (彰箕)、なし) 按  
天明六年御普請役等赤人イ  
シユ(ユ) (彰)、子) ヨ対  
面の時話なるへし右醉古筆  
記(東神) (彰箕)  
て(○)、へ

□神州の事よく知て畏へき国也と云へり  
又按漂民をさへかく速に顯官に取立各其人  
に因て是を用此後とても漂民あれば皆かく  
のこし可謂用心矣

紅毛(彰箕)、和蘭  
事(事) (外)  
用心矣(用心) 矣○天明三年  
南部漂流船主ベイタラレヲ  
ンセイイチヤと名を賜ふ其  
兒十七歳七十人の船師とな  
る(彰箕)

○五年ロシヤ本控噶尔の属国也しか此比より  
其貢獻を絶(西域聞見録)

其(無北国外京) (彰箕)、  
なし

○六年是より先清準噶尔を亡せし時阿睦  
爾(二十六オ)薩納清に降けるか又叛てロシヤに逃入清  
人は捕んと議す其辺費を啓ん事を懼然に此

納(○)、訥  
を(無北国外尊宮箕)、な  
し

賊兇狡なる故ロシヤ我味方とせんと欲し縛送せさりしか程なく病死せり其上清よりも厳く促れける故遂に其屍を清に送りけり《乾隆文集》

○軍船二十四隻快船礮船走船等を作水軍一万を増此後又ヘテルスヘルクにて軍船百余隻を作添《本書此前にカタリナの時軍船一百四十隻を作軍士三万人を載○世伝》

○十一年控噶尔に貢賦停けれ共責問も無りしに却て兵を以是に加へしかは控噶尔兵を發して大に戦《聞見録貢賦を停るより七年とあれは此比の事なるへし》

○十二年エリサベト死甥ベテルデテルデ立

○十三年死妻カ(二十六ウ)タリナデテウエエデ立《世伝》カタリナはゼルマニヤの盜法児多国の女にして延享二年ロシヤに嫁す《増訳》

○舶を發し氷海を越へツクツツキの北尺頭を経て東地と《夷呼(北亞細亞)西地との《夷呼(亞細亞)歐邏巴》問海上にて嶋々を多く開得土人に教て皮革を製し交易をなさしむベリングス嶋に総司を置て是を処置せしむ此嶋々を惣称してアルク、ト諸嶋と云東地に属す是より後常に此海路を往来す

れ…し(国外)

船…舸(彰)

作添(無北国外尊宮京②彰箕、作(二字分空白)

前…処(外)

る…て(外②彰箕)

夷…住夷(国外尊京②)  
夷…住夷(国外尊京)  
リ(無北国外尊宮京②彰箕、ル

○明和七年ロシヤ控噶尔と戦ひ全軍覆没し又土尔扈特の兵を借て合戦し又打負て前後に二十万の師を失ふ土尔扈特大に懼てロシヤを棄て清に降る控噶尔数十万人ロシヤの国都まで攻入口ロシヤ大に恐和を乞て又臣と称し(二十七ウ)常貢の外に年々童男女五百人つ、増納す

攻…侵(②)  
し(無北国外)、す

《聞見録》○控噶尔と云国諸書に見へす聞見録の説疑へしされとも土尔扈特は此敗れに依て清に降るといへは清人の書する所絶てなき事にも非るにや若しくは控噶尔と云はセルマニヤには非すやセルマニヤまたホウゴドイツと称す又一名黄祈国と云はホウゴを省きたるかホウゴ黄祈何れも控噶尔と音相近しセルマニヤは西洋の祖国なれば諸国よりは是を援し故清人聞誤て大国とせしにや未審ければ附して一考に備ふ》

降…婦(京)  
は…り(国外)

按聞見録にロシヤの俗君臣の義を重んずと云され共ロシヤは本控噶尔の属国なるに是に叛きて兵を加ふるに至る不義の大なるもの也縦小々の義に似たる事ありとも放飯流歎而問無齒決と云ものにて本より義とするに足らざる也

しに(無北国外尊宮京②)、  
にし  
は…とも(国外宮)、共  
(無北尊京②)

而(尊宮京)、なし

又按黠虜の東方を窺伺する事本より其志ありといへとも此比より以後益々甚敷なりたるは是時の敗喪によりて東方を経略し西方にて敗たる償を東方に取んと志せしなるへし是歳七月夜中北方に赤気あ<sup>(二十七ウ)</sup>りて緒の如く人皆怪たり然に清人も是を見たる事秋坪新語に見へたり海外の国といへとも符節を合するかことし天意は知るへからされとも戒懼すへき事なるにや

○八年諸州の海路を分ち地理を試んため一船を發しセレホレスコイセカアフ《カムサスカとヲホツカの間に在》に至る時にロシヤより罪を被り此辺に謫せられ居たるハンペンゴロー《名はアウス》と云くせ者此船師に説て共に乗組開帆し蝦夷地シモシリに船をかけ《拾遺》是より東海を乗廻し所々の海上にて下ケ繩などして海底を測り奥州灘を乗り上総の鼻に漂着し阿波国に至薪水を乞得て琉球を<sup>(二十八オ)</sup>経て天竺の南海を廻り三年を経てフランスの内バテリイ《バレン宗の出たる地》に着トイチ国にて和蘭船頭に書簡を贈り《草紙兵談拾遺》両度撫恤の恩を謝し《上総と阿

は…に(東神)  
喪…哀(無北国外②)、走  
(東神)  
せし…す(外)  
緒…赫(②箕)  
怪…騒(尊)

し…して(②)

師(無北国外尊宮京②彰箕、帥)  
乗組開帆し蝦夷地シモシリに船をかけ《拾遺》是より東海を(彰箕)、なし鼻…関(東神)  
国…国《即セルマニヤ》  
(箕)  
和蘭…紅毛(彰箕)  
草紙兵談拾遺…拾遺草紙兵談(彰箕)

波なるへし》且曰我今年カヨウト船二艘フレカトト老艘《何れも船の名》カムシカツテカよりルス国《ロシヤの一名》の命を受要害のため□日本国の筋を乗り廻り看又一所に集候筈に候必定考候は来歳マツマエの地其外所々鳴々へ手を入候事に相聞え候カムシカツテカの近所クルリス《蝦夷也》と申嶋へ砦を築き武器等を込置候件の次第ホーコエーテレンス《紅毛国頭分の人の事也》へ対し尽く告知せ度候へ共如此書を通し候事ルス国の嚴禁に候今爰に信<sup>(二十八ウ)</sup>を尽し候儀を以朋友にも被比候儀希候且エヲロツハの人物故の事に候私に云貴邦より船を被出置其害を防ぎ給へと云遣し《図考引和蘭通詞和解》又東洋の図をも副へて贈る其図

〔平出〕神州の東西ともに悉く記し松前のエサン山まで微細に記したり《図考草紙》是より□神州及び蝦夷の鳴々地理甚委敷なれり《草紙》右の二人ロシヤに帰りて賞賜有且船師と成大船八艘を卒て天明六年アメリカに赴と云《拾遺》  
○此年ヲロシヤ官人ハセローイツコイス二人

に…と(彰箕)  
え(無)、へ

紅毛(彰箕)、和蘭

比(無北国外尊宮京②彰箕)、

致

被(外彰)、取

和蘭…紅毛(彰箕)

詞…辞(外彰)

る…りける(彰箕)

悉(宮②箕)、委

師(無北国外尊宮京②彰箕、帥)  
て…して《図考》(彰)、て  
《図考》(箕)

命を受諸州海路を分ち地理を試るイルコウツカより発「ホレセレス」<sup>二十九オ</sup>「セイカアファカ」

カ（無北国外）、カ

嶋に至時ハンペンコロ一舟に乘移り二人□日

本より大唐南海を廻り大西洋を歴て帰国せん

事を勧むイツコイス諾せずハセロー進て船を

発しシムシリ嶋に至り《シムシリはウルツフ

のさきにあり》イツコイスは此より頻に帰ん

と云捨て船を發し三年を経てフランスの内バ

テリーと云所に帰着す《イツコイス蝦夷に助

られて帰国す》ハンペンゴローは流人故身を

隠すバセローフ帰朝行巡の賞賜ありイツコイ

スも賞せらる二人共に船師と成大船八艘を以

今年アメリカに赴く《天明六年イシユヨ話な

るへし右醉古筆記》

○安永元年ウルツフ《古よりエトロフクナシ

リネモロアツケシ四部<sup>二十九ウ</sup>の蝦夷の獵場なり》

に滞居する事次第く、に多くなり此夏などは

六七十人來り小屋を作り魚獵席を取てムスク

ハへ送る後蝦夷と争論出来ければ《ウルツフ

にて争闘の起りは蝦夷の宝とする太刀の類を古

木の穴へ隠し置たるを赤人其木を伐取太刀等

を奪取る蝦夷償を可取とて言つこのり争論に及

フランス（国外）、フラン

スヤ

国（箕）、船

朝（彰）、国

あ（彰）、なし

く（②彰箕）、り

る：り（②）

ルツ（無北国外②彰箕、

ツル

言（無外尊宮京②彰箕、

其

ふと云は此時の事なるべし》赤人云ウルツフ

はチユフカムイ《ロシヤ王を云》の嶋なれば

獵席はチユフカムイトノへ出すべしと云エト

ロフの乙名ハツハアイ云此嶋は古よりカモイ

殿の領地《カモイは神と云義松前家を尊崇の

ことはなり》にして年々取し獵席は勿論何に

てもニシハ《運上屋也》へ出す法也汝等此比

初て来て我儘なる振舞也とて互に打合《本多

凶考》蝦夷打負たり此後《明年の事也》クナ

シリエトロフシモシリ前路の諸島の<sup>二十九オ</sup>衆夷を

会めウルツフに至赤人を待て打勝各島々に帰

し跡にて赤人襲來りシモシリ諸嶋に打勝此後

シモシリ前路の諸島皆其ウタレ《家來なり》

となる《凶考取拾遺》ウルツフへ獵事に往し

蝦夷赤人大勢來と聞周章逃歸る風に遭て溺死

するもの百余人船を出し後れて存命する者二

十余人有然るに赤人讐を報るに非行路の蝦夷

を連來て和を乞土産を送る是より蝦夷喜て和

睦して年々ウルツフに來《拾遺》

按凶考に三十年前争闘ありしよりシモシリ

迄を服従し其島々の名を改めてロシヤの名と

すと云《其名等は今略す》又<sup>三十ウ</sup>利明か説に

出（国外）、遣

島々（外）、嶋

取…参取（彰箕）

報（無北国外②彰箕）、服

安永年間より魯齊亜国人次第に多く入り込

て所々に長城を築き銃類も魯齊亜より送り

たると云り殊に近年に成シモシリ嶋辺へ大

西洋の商船渉海して交易をなすと云説有い

また実否を不知扱又松前より西蝦夷陸地を

経て海辺に至りソウヤと云所有此所より海

上凡十里を隔て唐太島有此島殊に大嶋也松前

在所嶋より勝れて大嶋也と云此嶋を□日本

に西蝦夷と云也北極出地凡四十四五度也依

百葉百穀豊饒の国と成へし《此説いか、あ

らん後考を待へし》ムスクワ或は山丹に奪

はれぬ様に有度ものなり往古より日本の商

舟渡海して交易を為と云り鉄砲<sup>〔銅鉄の〕(三十一オ)</sup>類の物を

乞望て交易為すと云り土人至て少にして周

廻の海辺に斗りすみ皆深山曠野のみ也

又草紙にノビ辺は獵席第一の獵場なれ共赤

人心のまゝにふるまひ蝦夷人は愚なる故

掠められたる也獵席皮は□神州の名産にて

長崎に廻し唐人交易の代り物にせしに近年

は赤人とも直に北京へ出すと云と見へたり

此説の如くなる時は□神州より渡せし産物

を北虜より清へ渡す事我属国を取られしを

て(無北国外尊宮京②)、  
なし

易(無北国外)、代

て(国外)、る

、…に(無北京②)

鉄砲…鉄砲の(外)

に…に日(箕)

め(東神)、なし  
に(箕)、へ

より…の(東神)

外国まで其証を顕す也遺憾に非すや

○三年ヒイトルカアベルトインベルケなる者

和蘭人に<sup>(三十一ウ)</sup>混して江戸に来大城殿中の様子ま

てを<sup>(三十一ウ)</sup>図し帰ると云

或説にカビタンのコークなる者をして世界

を不殘見聞せしめし事寛政壬子より十三年

以前なりと云此年より壬子まで十九年前な

れ共江戸に来しは十三年以前なるへしと云

按一書に□神州の地理に通達し国郡城郭營

壘まで能々図にせしと云へるかくの如く心

を用たる上にはさも有へき事也

○六年赤人三十五人ノチカマフまで来り交易

をはかる久奈尻のツキノ井水先す《舟人案内

するものを水先と云○醉古筆記》

○七年赤<sup>(三十一オ)</sup>人の通詞ヒヨトロ初てウルツフに

来と云松前士人新井田大八キイタツフに往赤

人三十余人土宜を献し交易を請《醉古筆記》

○八年松井茂兵衛等返答に発帆しけるに風浪

にさ、へられて逗留する内赤人待兼てアツケ

シ近所チクシコヒまで来松前の士人到着交易

叶はさる意を通し船費を与へて帰す《醉古筆

記》

和蘭人…紅毛夷(彰箕)

し…して(国外彰)

ク(無北国外)、<sup>疑ク誤</sup>コ

世界を(②彰箕)、なし

聞…分(彰箕)

三(無北国外尊宮京②彰  
箕)、二

共…は(東神)

に…にて(外)

井(彰箕)、前

コ(無北国外尊宮京②彰  
箕)、ユ



○此比よりウルツフ等の鳥々次第に多く来ノツカマフ《本蝦夷地》まで来て滞居す《引書可考》

○去年松前の臣ノツカマフへ行《拾遺作キイタツフ》虜エトロフの《図考》《酋長ツキノイを水先として役人へ対面し交易を乞松前氏へ書簡土産を贈役人明年エトロフにて返答すへしとて帰り今年》<sup>(三十二ウ)</sup>松前より又吏をして彼地に行しむ順風なく延着せしを虜待兼て段々チクシコイ《アツケシの東》まで来こゝにて対面し外国の交易長崎に限るとて其書簡土産を返す《参取拾遺図考》此時虜海上に繩を張て来アツケシ迄の鳥々里程方角共に委く究たり

《草紙》

按寛政壬子の書に十三四年前虜クナシリよりキイタツフへ乗移り蝦夷酋長《図考亦載》ツキノイとて勇猛無双近国へ聞えたる者を先達として来り交易を乞と云も此事なるへし此ツキノイは諸夷を威服したる者也然に是を先達とせし心根可惡事也<sup>(三十三オ)</sup>  
○九年虜イシユヨ等初てウルツフに來《拾遺》

此比：同年(②彰箕)、八年此比(東神)來：成(無北国外尊②彰箕、なり(外)へ(国外②彰箕)、えフ(無北国外尊京②彰箕)、

土(無北国外尊宮京②彰箕)、小委(彰箕)、悉

三四：三(国外)移：触(彰箕)亦：所(尊)え(符)、へた：け(彰箕)

ル(無北国外箕)、なし

按図考シモシリ諸嶋三十年前よりロシヤに服せしに二十年前より悉くロシヤの風俗に變し男女髪を組み帽子を被り股引靴を着し鉄砲玉薬を与へロシヤ言を使ひロシヤの佛像を頸に掛ロシヤより役人并に教法師《蝦夷是をヨウロウイシヤムと云》をして時々諸嶋に至り撫順せしめ悉く貢を入しむと云然に此イシユヨ此後邪法を以エトロフを誘たる事あればシモシリをロシヤ風に変せしも即此輩のなせし事なるへし

○天明三年伊勢白子の民去年漂流して今年虜地<sup>(三十三ウ)</sup>へ着

○宝曆中漂流せし勝右衛門の子ロシヤ船師と成是歳七十余人を卒て唐太に至土人に討殺さる《図考》

○五年ロシヤ人イシユヨ等三人エトロフに至宗門の十字杭を立て夷人へ宗門の符咒等を教ハウシヒといへる蝦夷虜と殊に親し髪をも長くしてロシヤ風と成後近藤重藏此夷に問けるに答て曰赤人佛像を与へ符咒を教て曰是を尊信すれば漁業も盛に成破船もなく其外願事叶さる事なしと云と答《図考》

頭(無北外尊宮京②彰箕)、

へし：へし○天明元年イシユヨ再来(②彰箕)

中：年中(箕)

右(無北国外箕)、なし

討(国外)、射

○(無北国外尊②彰箕)、なし

イシユヨ(国外)、シイユヨ

三(無北国外尊宮②彰箕)、二

至：至りて(外)蝦夷：蝦夷人(国外)

し：しく(東神)く(無北国外)、なしと：に(外②)叶(無北国外尊宮京②彰箕)、聞

○赤人アツケシ近所チクシコイ迄来《久奈

尻請負飛驒屋久兵衛口書》蝦夷府松本伊豆守

秀時に命して山口鉄五郎高昌菴原弥六宜方皆

川冲右衛門秀道青嶋俊蔵<sup>(三十四才)</sup>軌起佐藤源六郎行

信福田新三郎忠備大塚小市郎昌起大石逸平最

上徳内の人々見分に下る《並醉古筆記》

○六年最上徳内等ウルツフ嶋シヤルシム迄往

赤人イシユヨ等三人と会す《醉古筆記》

○虜船東海より南部津軽の間西に走り江良町

村《松前地》の沖に船を懸又小巻村《同上》

の沖に懸り蝦夷人を見て餅と酒とを与ふ《利

明説》此事を蝦夷に問ふに彼船中八十余人上

下の別有と云《図考》かくの如き大船の内海

に入し事古よりなき事也とて土人怪けり《利

明説》此船唐太にも暫くかゝり所の蝦夷に酒

餅を与ふ《拾遺》

按拾遺に明和八年□神州を乗廻せしアウス

等二人<sup>(三十四才)</sup>大船八艘を率て北アメリカに赴と

云其内の一艘こゝに来ならん

○是歳□幕府の吏山口某最上常矩ウルツフに

至る時エトロフに赤人イシユヨ等三人滞居す

蝦夷を以て諸の事を問へ共不詳且赤人共隔心

○…○同年(彰箕)

シ(京彰箕)、ン

コ(無国外尊宮彰)、ユ

本(②)、平

宜(②彰箕)、寅

沖(②彰箕)、仲

俊(彰箕)、鉄

市(東)、一

間：間を(無北国外)

松前：松前の(無北国外)

②ハ：は(②箕)

有て詳に不語依て其僕を赤人に副へ置飲食ま

ても共にして彼国風及び此地に来るのよしを

探るに彼国王ベテル以来諸国を併呑し守護を

置蝦夷地の末の諸嶋をも属せしめ広く交易し

て有無を通す依て天朝と交易を願ひ又□神州

の地理をも一見せん事を諷す《拾遺》

○寛政元年ロシヤ船唐太西部シヤウニに泊

して海<sup>(三十五才)</sup>底の浅深を測上陸して蝦夷人と呼ひ

其毛髪を切り身の丈を量り後に鉄の燧器を与

ふ《図考引最上常矩記》是より北部ウノヌイ

フトの間にて難船し僅に五人助命して西部ナ

ツ、コクテトの間に居山丹人と争論し其後婦

国せし事あり《図考引高橋某記》

○トレツコエ《トルコなり》軍を起し加勢を

シウエツ《雪際亜也》に求め兩軍ロシヤを攻

むロシヤ勝利あり其時右の兩軍大船百八十五

艘也ロシヤ軍中大砲百二十砲の口幅一尺

或説にロシヤ人トレツカ国へ交易に行しを

殺害せらる是に依てロシヤより兵を出した

りと云は是なるへし<sup>(三十五才)</sup>

○三年トレツカと和睦す

○ロシヤ人三人小舟にて唐太西部ツンナイへ

浅(②彰箕)、なし

り：り先も(②彰箕)

来る松前の吏是を問に其人云本国はカムサス  
カ辺也三年前獣皮交易のため山丹に行今年帰  
国するに因てカラフトよりソウヤへ渡り又ク  
ナシリエトロフへ渡り帰へしと云吏人は是を留  
む其人云ソウヤ渡海ならざる時は又山丹へ戻  
り帰国すへしとてツンナイ出船せし由《図考  
引松前届書》

○是歳虜伊勢の漂民を城下まで送る

按するに漂着してより十年の間所々滞留せ  
しめ此度城下に引入たるはトルコとの争乱  
静りし故なるへし

後此漂民の内新藏なる者名を改て虜中の役人  
と成

○初(三十六オ)『め虜イシユエ等エトロフに七ヶ年滞留(疑ユヨ)

し今年帰国す遠き嶋々までも見究めたりとて  
国王より賞せし由《図考》

○幕府より最上常矩和田某をウルツフに遣し  
ロシヤ人に逢是後松前よりも人を遣す

○四年漂民を送て蝦夷地のネモロに至《南部  
漂民徳兵衛の子も乗組来》初め漂民虜城に至  
りし時女酋の云けるは交易改度思召も御座候  
は、随分船は差遣可申候然共別而此方より願

是歳虜 (②彰箕)、なし

留 (②箕)、居  
王 (②彰箕)、に  
し由…らる (②彰箕)

地の…の地 (②)

は、…て (箕)  
遣…出 (彰)

候と申義に無御座候間何れにも御勝手次第に  
可被成候此趣□日本国王へ可被申上とて夫よ  
り開帆しけると也

按するに虜此後しはく交易を乞て止事な  
き程な(三十六ウ)るに此時はさのみ願ふにもあらさ  
る類にもてなしたり始て使を通るの時より

して其詐偽かくのことし

既に着船せしかは松前役人は是を訊問せしに虜  
直に江戸に往て漂民を渡し書状献上物を指上  
可申と云けるを松前にてとめければ明年四

五月比までは相待江戸より御沙汰無之候は、  
是非江戸表へ直艫可仕と答ける《或書に來春  
品川浦被乗込可申候其刻御指留御無用の段云  
たりと云》

按するに虜先年松前家の了簡にて押返され  
ける故此度は近々と乗込其上かくの如き悖  
慢の辞を吐きて是にても強く押返されんか  
又驚て江戸まで達せ(三十七オ)られんかと試みしな  
るへし

又貢物并に仮名文と横文字との二の書□幕府  
へ呈上す

按するに彼虜二書を上りし事□幕府にて処

候と…たく (②箕)  
趣 (②彰箕)、えも  
申上…申上候 (②彰箕)

詐欺…偽 (②箕)  
せしかは…して (②彰箕)  
申…申候 (箕)  
明年…然らば明年 (②彰  
箕)

る…り (彰)  
浦被…へ (彰)

き…く (②)  
又…又は (②)  
と…を (②箕)

文…字 (②箕)

置し給はんはんに四夷の表貢無礼の辞あるは拒

貢…具(②)箕

絶する事なれ共其余は□天子とても答詔を

古(②)彰箕、故して…も(②)箕

賜ふ事古今の通法にて広大にして究れさ

究れ…容(彰)

る事なきを示し給ふ也漢土にても亦かくの

る…する(②)彰箕

如き通例也然は虜の意を推量るに彼おもへ

受…交(②)は(②)彰箕、ら

らく其詞恭くして礼あらは受給はんか夫に

ても却給はんか無礼ならば無礼を責て却け

給はんか無礼を責ることもなく空く却給は

んか又松前の』<sup>三十七ウ</sup>処置にて却くるならば早速押

松前…松前家(②)彰箕  
早速…早速に(②)箕

返さるへし日数を経んは幕府の処置なるへ

し□幕府の処置ならば□幕府にて四夷の動

静にまでも心を用て武備を張給はんには必

紅毛夷の風説にても北虜の張大なるを知て

其情実を探給ひ必横文字も読得へし然は横

文字の書も答を賜んか若は横文字を読得ず

して仮名の書斗り答を賜はんか一は答を賜

一は不賜も事体不直とて二書ともに答を賜

さらんか仮名文は縦令解かたき事有とも推

量せは分らざる事有まし何の名を以返し給

んなど、二云事を試むるの素意なるへ

し』<sup>三十八オ</sup>幕府より長刀米等を誰に賜るともなく

只束て賜ひ右の表文は仮名文にても分りか

に…と(②)彰箕

たく一の失遺を生せん事を憚るとて二書共

く…し(②)彰箕

に松前家より返すと称して押返しけるに虜

承引しかぬるによりて失意と云を失礼の答

書に及んも計りかたきと云改て乃受取たり

初は貢物却けられけるにさらは賜物も受間

敷と云ければ不得已受給ふ交易は許されず

此上願あらは長崎に来へし彼地にて特に交

易の事を申し立商議の上彼此の利あらはと

て長崎通船の臨の路行を賜る

臨の路行…路引(②)彰箕

○虜監使に對し甚謹み退て大に嘆て曰我國の

書に□日本の人は甚外国を恐ると有

今』<sup>三十八ウ</sup>初て信したりと云『是さげすまれました

とて甚心を勞したるを見付られしならんか且

孫子も辞卑而益備者進也辞強而進驅者退也と

云しに色に頭れしか又辞強かりしか其事の決

断九月より六月迄か、りしをも彼か心には怪

みけんもはかるへからず』此時南部佐井の漂

民徳兵衛の子も乗組来しなり

○四年ロシヤ人イワノなる者カラフトへ来居

最上常矩是に逢其人鳥銃を持鎗を杖つき其服

は数年滞留とみへ山丹の服を服せりカムサス

カよりヲホツカサカリンカラフト辺の地図を

み(②)彰箕、ん

所持せり最上常矩是を模写す《図考引常矩記》

○六年仙台の民去年漂流し今年虜地に着

○七年〔ほぼ二行空白〕此比虜船一艘六  
三十九才十人内女三人クルムセの蝦夷一人乗組カム

サツカ出船ウルツフへ来家倉を作在住す九

年に二十八人十年に十四人帰国し残十七人

《内女三人》今に居残て蝦夷へは年々帰国す

へしと欺て更に不去虜の子生て既に五六歳に

及有所の蝦夷も赤人風にて髪を組髭を剃る

シモシリの夷赤人の通詞をするもの有鉄砲玉

薬の夥敷貯置十年余り常に用れ共今尚貯へ有

虜の中鍛冶するものもあり虜来し初アツケシ

の乙名イコトイ《ツキノイの子》も此嶋に越

年し虜と殊に親くロシヤ王へも狐席の皮を贈

れり前には赤人共蝦夷へ対し格別親みたる事

もなく又毎度漁場を争し事も有けるに三十九ウ辰

年エトロフ蝦夷とも赤人在留後初て渡海

せる時には赤人格別に夷人を親み厚く丁寧を

尽し夷人例年の如くウルツフ渡海せしに赤

人の家有故不審に思ひ沖合に躊躇す赤人小船

にて出迎ひ酒烟草等飲せ尽く馳走す夫より

日々飲食砂糖など贈りウタレに至迄酒食を以

カ出 (②彰箕)、なし

有 (②彰箕)、り

に (②彰箕)、なし

し…せり (②彰箕)

饗待す狐漁の事此度は争論せず蝦夷共狐席を

持行売んといへは□日本へ出すべき産物なれ

は買へからず軽物《狐席驚羽の類》は□日本

へ出すべきなど云日々引網を以漁事にて其魚

は半は蝦夷に分ち与ふ赤人云向後年々□日本

の産物持来らは彼国よりも品々持越交易すへ

し四十才《蝦夷地には□日本人も来居故□日本の産

物多かるへし〔数字分空白〕何品にても持来

るへし其内皮類尤望所也又米は格別に珍重と

云右赤人とも今にウルツフに留て不去《図

考》

○八年東蝦夷《アブタ》へイギリス船一艘来

武官の内にロシヤ人一人有て松前人へ通弁せ

り《図考》

○十年ロシヤの吏三人シモシリまで来翌年帰

国す本国の頭役替りし事と金銀の吹直し有し

事を知るために来と云《西洋の銭は皆其王

の面に象りて鑄る也其王死する時は鑄改る也

今去年の紅毛カヒタン風説書にリイス国女王

死する事を載すリイスは即ロシヤ也然は女

王死たる故金銀を改たるにや》

○幕府の吏《近藤守重最上常矩》エトロフを

軽物《狐席驚羽の類》は (彰)、狐席驚羽の類軽物  
は  
にて…する (②)  
ち (②彰箕)、なし

せ (②彰箕)、なせ

吏 (②彰箕)、夷

女王死する事を載すリイス  
は即ロシヤ也然は (②彰  
箕)、なし

故…故に (②箕)  
にや…也 (②)

見開

○十一年其海路を開

○十二年近藤守重山田喜元と共にエトロク  
元(箕)、充  
フ<sup>(四十ウ)</sup>を按察しロシヤ人イシユヨの建し十字  
ヲ(②彰箕、ラ

杭を倒し同嶋カムイワツカライに木を立て標  
としシヤナに会所を立漁場十七八ヶ所を開

○享和元年エトロフを新開しロシヤ授る所の  
仏を棄しめ其変する所の風俗を改て□神州の  
俗とす

○幕府の吏<sup>(富)</sup>《富山保高深山某》ウルツフに行  
虜に逢

○ロシヤ王アレキサントル立《拾遺にカタリ  
年(②箕)  
ル(②箕)、なし

年老て嗣子バアリヨベツトロイシユに譲と  
見ゆ然るに幸太夫彼国の城に至りし時は女王  
カタリナ也拾遺は天明六年の書也幸太夫彼城  
下に至りしは寛政三年也年曆疑はし○又按に

カタリナ死たる事他の書に見へされとも寛政  
の九年長崎着船紅毛の風説書にリイス国女王  
死たる時西洋諸国大に乱たる事を載す女王は  
カタリナなるへし此事寛政六年の事の下に載

たれば六年以後の事なるへし又前文に云こと  
く金銀を改し事あれば寛政八九年の間に死せ

しと見へたり送帰の沙汰なきはハアリヨベツ  
トロイシユの仙台漂民紀事云私共八ヶ年イリ  
コウツカに居アレキサントルの<sup>(四十一オ)</sup>父は至て病  
身にして国の掟にも不構此王死て後今の王と  
成然所其祖母女王にて民を憐み幸太夫等をも  
送届し也云々は是に拠時は女王国をは譲たれ共  
政をは撰せしにカタリナ死て乱の起りしにや  
又カタリナ其子を廢して再ひ立カタリナ死て  
其子又立しにや追て考べし○又按拾遺にもバ  
アリヨベツトロイシユが残酷なる事を載たれば  
とかく不善人と見へたり○又按アレキサント  
ルはカタリナの子孫也享和三年□幕府へ呈せし  
書に即位してより三年と書する時は今年立た  
ると見へたり《時年二十四》幸太夫説○拾遺  
に拠る時は二十七歳也可考人愛よく仁徳を行  
ふと云《仙台漂民紀事》

○二年ロシヤ人マンコの大河《黒龍江也又サ  
カリイン川と云》の辺へ来ると蝦夷カリヤシ  
ン語る《図考》

○三年仙台の漂民を城下に送る  
按るに虜通商を乞の書に紅毛フランスアン  
ゲレスイタリヤイスパニントイツ其外国々

所…に(②箕)

は…も(②)

人…の人(②箕)

に…には(②)

る…て推(②彰箕)

河(②彰箕、海  
と(②彰箕、なし

ン(②彰箕、なし

戦争差発といへとも我國の計ひを以国々相  
鎮め太平に及ふと云是寛政九<sup>(四十一ウ)</sup>年の比の書  
にリイスの女酋<sup>酋</sup>死せし所トルコと合戦に及  
ひてテイネマルコスウエーデンノールトア  
メリカ此三ヶ国の外西荒の諸戎何れも合戦  
に及ふと云へる其乱の此比静りしなるへし  
然は漂民を是迄所滞留せしめ乱平きし故城  
下へ送りしならん

其内六人を留め四人を船に乗せ開帆

○文化元年九月長崎に着彼の腹心の臣《表  
文》レサノツトなる者をして漂民を送り且カ  
デヤツク《東蕃の内》に在《アレウテキエス  
《カムサツカ東蕃の間に在》シエンレス《カ  
ムサスカの辺に在》等之島々より乗渡りて交  
易せん事を乞

按するに虜覬覦を懐く事久し然れとも本国  
より兵を<sup>(四十二オ)</sup>発する事道路懸遠にして便利な  
らすカムサスカの近辺より兵を發せんには  
曠漠の野人民稀少也故にしばく降人罪人  
等を徙して其地を繁盛にせり且ヲホツカカ  
ムサスカも既に港になりて人民頗る多くな  
れりされ共此近辺の地他に交易すへき諸蛮

国々…各国(②箕)  
太…大(②箕)  
酋…酋長(②)

内…西(②箕)  
アレウテキエス《カムサツ  
カ東蕃の間に在》シエンレ  
ス《カムサスカの辺に在》  
(②彰箕)、なし

れとも…にその(②彰箕)

カ(②彰箕)、なし

ツカ(②彰)、フ

他(②彰箕)、なし

も寡ければ今□神州と交易を始て右之島々  
をも慰富の地となし他日用兵の資とせん素  
謀なるへし

又按仙台漂民紀事に虜交易を求るは彼其民  
の乏を救はんため也と称する故其國中感服  
せし事見たり是交易を不許は彼其民を怒  
らし秦穆公晋<sup>(四十二ウ)</sup>を敗るの術を施へし交易を  
許時は前にいへる如くカムサツカ近辺の  
嶋々を繁盛にすへし両なから彼か利となる  
所なり

又按するに長崎も松前も同しく□神州の地  
也事を議する人はいつにても□神州の人也  
一たひ交易を許さ、る上は長崎迄来たり共  
又許さるへきに非然るに彼又長崎へ来りし  
は先に長崎へ来て願ふへしと有しを彼必苟  
且の辞也と思て又来しなるへし是に依て彼  
又一術を以試しならん其意□幕府利害の大  
体を明知し給は、長崎へ行たりとも必交易  
は許給ふへからす若し交易の小利を貪り兵  
を用るの小害を懼れ長崎へ来るへしとあり<sup>(四十三オ)</sup>  
し小信に拘り給は、交易を許し給ふへ  
し又先年も決断の後かりしは有司にも交

乏(②彰箕)、令  
事…事と(②彰箕)  
見…見へ(②彰箕)  
の嶋々を…に(②彰箕)  
な…す(②箕)

さ、る…されさる(②彰  
箕)

たり…る(②箕)

に…に一たひ(②彰箕)

術…時(彰)

は、…て(箕)

へからす…まし(②彰箕)

を…の(②)

へ…まで(②彰箕)

ありし…の(②彰箕)

後か…緩な(②箕)

易を欲る者有てならんか然らば其人の議行はれましきにも非なと、云事を僥倖せしならん又其試むる事は松前も長崎も同じく□神州の地なれば備を設る事も同じき筈也若其異なる事有らば表を張給ふならん裏口と表口との備へ如何ならんと試み又決断早きや遅きやなど、試しなるへし

異…意(②箕)

○二年交易の事歴世の法なれば御許容なりかたしとて押返さる虜初はカムサスカより東南海を廻り長崎に至しか西北海を乗廻して帰帆(四十三ウ)す

こそ…にして(②箕)

按するに孫子に不戦而屈人之兵と云事こそ醜虜の上計なるにかくまで智術を尽したれとも交易を許給さるは上兵伐謀と云者にして誠に□神明の保護□国家の大幸と云へし此事を信を失ひ給ひしやうに云者もあれとも本より交易を許へしと云しにも非長崎にて願へしと云たるまで也此一言も無きにはしかされ共信を失ひしと云には非かく彼か素謀の相違せし上は彼本より□神州にて外国を恐る、と思ひし事にては有辺陲を乱て又試むるより外の術は有間敷也(四十四オ)

護…護にして(②彰箕)

と(②彰箕)、なし  
に(②彰箕)、なし

此筆記は二十余年前に諸書中より抄録せし所也其比迄は戎狄の国より辺地を伺ふといふ事も僅に蝦夷の千島の音つれに聞えしのみにて虜情を審にせし人も未多からされは怪しき事に思ひ筆のまゝに抄録せしかとも浄写もせされは人にも示さ、りき其後幾程をも経ざるに蝦夷の奥地も異賊の焚掠に逢ひ長崎をも洋夷に擾乱せられ又十余年にして夷虜江戸に來らんとて浦賀の湊へ兩度迄推参し或は辺海の諸国には夷船眼前に幾艘ともなく多年停泊して常奥の地に登陸し薩摩の属嶋をも鹵略せしなとさま／＼の事に及たれば今は彼か情実を審(四十五オ)にせざる人もあるへからす扱は此筆記も諺に古き曆といへるか如くなれば炎火に投

え(修)、へ  
て…して(東神)  
怪…險(東神)  
録…録と(東神)

せんと思ひしかとも又二十年前の事をも思ひ出してさすかに鶏肋なれば姑く囊中に蔵て蠹魚の食ふに任せんにはしかすされとも弱冠の比の漫録にしていまだ定見もなく聞見も狭く又緒謬も少なからす諱忌に渉る事もあるへければ努々人にしめす事あるへからす甲申冬日烏有山人書於爛紙堆中(四十五ウ)

て…して(外)  
奥…陸(国外)  
鹵…鹵(無北国外京②)  
た…ぬ(東神)  
せ…知ら(無北国外尊宮京)、し(②)

出し…やり(東神)

緒…紙(無北国外尊宮京)  
②



嘉永七年甲寅七月二十八日写了 栗田寛<sup>(四十六才)</sup>

解題

(一)

『千島異聞』は文化三十五年(一八〇六)ごろに書かれた、会沢正志斎の著作である。天明二年(一七八二)生まれの会沢にとって、二代半ばの初期の著作であるといえる。

本書は、「諸書中より抄録せし所也」と会沢自身が跋文で述べているように、おもに他書からの抜粋・引用からなる著作で、今まであまり注目されておらず、研究の蓄積もほとんどないというのが現状である。その内容は、あとで触れるように和漢洋(ただし、洋は原書ではなく翻訳書である)の二十数種類の「諸書」の「抄録」を主体とし、会沢自身の手になる文章は全体の約四割を占めるのみである。

本書は前半と後半に分けられる。まず、日本の北方関係略史、次いでロシアの略史および風土・都城・風俗・交易・衣服・教法(宗教のこと)・学校・刑罰・軍制の現状が記される。以上が前半で「総説」とよばれる。後半は、年代記風にロシアの東西南北への発展・経略史が論じられる。諸写本のうち二巻本では享保元年(一七一六)(本文一九頁下段五行目)から下巻が始まるが、内容のうえでの切れ目とは考えがたい。

上下二巻の分け目は、寛政三年(一七九二)(本文二二頁上段七行目)までの分量で二分したにすぎないと思われる。

(二)

引用書を紹介する。まず和洋書を本書での登場順にとりあげる。

朽木昌綱著「泰西輿地図説」 寛政元年刊

「歴世紀事」

前野良沢訳「魯西亞本紀略」 寛政五年訳了

(「魯西亞本紀」ともいう)

佐藤玄六郎著「蝦夷拾遺」 天明六年自序

工藤平助著「加摸西葛杜国風説考」 天明三年自序

(「赤蝦夷風説考」ともいう)

桂川甫周訳「魯西亞志」 寛政五年訳了

「狄志」

山村才助著「訂正増訳采覧異言」 享和二年(一八〇二)

「世伝」

近藤守重著「辺要分界図考」 文化元年自序

工藤平助著「三国通覧補遺」 天明六年序

本多利明著「本多氏策論蝦夷拾遺」 寛政元年自序

木村謙次著「魯齊亜異舟来渡略」 文化五年

(文中には「醉古筆記」とある)

最上徳内著「蝦夷草紙」 寛政二年

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
	無窮会図書館	東北大学附属図書館	市立函館図書館	内閣文庫・修	北海道立文書館	国立国会図書館	内閣文庫・外	尊経閣文庫	宮内庁書陵部	京都大学附属図書館	東京大学総合図書館	神宮文庫	尊経閣文庫	天理大学附属図書館	彰考館	箕作阮甫写本
全1巻1冊本								○	○	○	○	○	○	○	○	○
上下2巻2冊本	○	○	○	○			○									
上下2巻1冊本					○	○										
跋文あり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
署名あり	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		
寛政3年まで	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
文化2年まで													○	○	○	○

備考

- ①末尾に、「明治十三年二月三日以一本校之 井上頼園花押 頼園云是ハ水戸人会沢正志ノ著ナリ」と記す。
- ②末尾に、「右正志齋会沢安著大正十四年水戸市寺門誠謄写す」と記す。
- ③書陵部の凶書カードに、「大正写」とある。
- ⑩『国書総目録』には、「京大(欠本、一冊)」とあるが、「完本」である。
- ⑫「古事類苑編纂事務所」「内藤耻叟」「多計適舎所蔵」の印がある。外題に『蝦夷千島異聞』、内題に『千島異聞』とある。
- ⑬表紙に『蝦夷千島異聞』、外題に『蝦夷誌三』、内題に『千島異聞』とある。頭注に「玩甫ノ注下同シ」の朱書と注記があり、⑯を参看・校訂していることは間違いない。
- ⑭末尾に、「嘉永七年甲寅七月二十八日写了栗田寛」と記す。
- ⑮『国書総目録』に記載がない。「水戸藩産業史研究会蔵書印」の印がある。
- ⑯箕作俊次氏蔵、国立国会図書館憲政資料室寄託。『国書総目録』に記載がない。

林子平著「海国兵談」  
 天明六年自序

加藤肩吾著「魯西亜紀聞」  
 寛政四年

(「魯西亜実記」ともいう)

永井惣兵衛著「仙台船魯西亜漂流聞書」  
 文化三年

(文中には「仙台漂民紀事」とある)

〔和蘭風説書〕  
 寛政九年

これらのうち、「歴世紀事」「狄志」「世伝」は未詳である。  
 あるいは伝存しないのかもしれない。「歴世紀事」「世伝」は  
 「魯西亜本紀略」と、「狄志」は「魯西亜志」と、内容上一致  
 するところが多い。同一原書の別人による翻訳または同一人物  
 による未完成の翻訳(習作)と推測される。

和洋の引用書一覧からいえることは、文化初年における入手  
 可能なロシア関係書を網羅しているということである。会沢は  
 「彼か情実を審に」(自跋)するべく最新の情報をもとに「北  
 方問題」に危機感を募らせていたといえる。

次に漢籍を紹介しよう。

長白七十一椿園著「西域聞見録」  
 方式济著「龍沙紀略」  
 艾儒略「職方外紀」  
 南懷仁「坤輿外紀」  
 希福・巳泰等修「三朝実録」  
 「三朝事略」

「会典」

陸次雲著「八紘訳史」

「乾隆御製文集」

天漠浮查人戯編「秋坪新語」

このほかに、「孫子」「史記」「孟子」「三國史」等の古典も引かれている。これらの漢籍の本書中の比重は和洋書に比べて軽いといえる。引用頻度も少なく、和書の孫引きとみられるものも少なくない。

(三)

諸写本の異同と系統について述べよう。右表のように、現在までに一六本判明している。①～⑤、⑥と⑦、⑧～⑩、⑪と⑫、⑬と⑭、はそれぞれ同系統の写本といえる。そのうち、①～⑤および⑪と⑫はそれぞれ一丁の行数と一行の字数が全く同じである（漢字と仮名の違いや漢字表記の違いは含まない。なお、①～⑤のうち、①には二箇所、②と④には一箇所それぞれ一字分のズレがある。また、①～⑤には頭注や傍注が五箇所あるが、③では三箇所、④では一箇所、⑤では五箇所全部欠けている。これらの注が書写者により書き加えられたものとすれば、この五本は⑤がもとにあり、③、④、①・②と写されたと考えられる）。⑦は⑥（と同系統の写本）を写したものであろう。⑧は⑨と同系統の写本（現存しない）を書写したものとされる。⑫と⑬は外題（表紙）には「蝦夷千島異聞」とあり、内題が「千島異聞」となっている。⑮と⑯は『国書総目録』（岩波書店刊）に記載がない。また、同目録では⑩が「欠本、

一冊」とあるが「完本」である。さらに、同目録では⑫と⑬の著者が「烏有山人」とだけあり、この筆名が会沢その人であることの指摘が欠けている。

自筆稿本は現在所在が不明であるが、かつて瀬谷義彦『会沢正志齋』（文教書院、一九四二年）において冒頭の部分が一枚、写真で紹介されたことがある。そこには題名が『千島異聞』『千島近聞』と並べて書かれてあり二案あったことを窺わせる。

(四)

本書の史料価値については、まず、本書は会沢の『新論』（文政八年一八二五）へいたる思想形成過程を知るうえで欠くことのできない史料であるということがいえる。『新論』以前における会沢の政治思想上注目すべき著作は少なく、本書と『諸夷問答』（文政七年）をあげることができるにすぎない。その他の著作としては、『居喪大意』（文化一三年）、『心喪略説』（同右）、『西行日録』（文政三年）、『西行詩稿』（同右）、『遊詩稿』（文政五年）、があげられる。第二に、本書には「歴世紀事」「狄志」「世伝」という現在までのところ失われている（と思われる）史料のいわば逸文が数多く残されていることである。今後の史料発掘により、初期の蘭書翻訳事情が解明されるための貴重な史料といえる。

(五)

最後に、翻刻にあたり底本に天理大学附属天理図書館本を用いた理由

を述べよう。それは、まずこの写本が文化二年まで記載があり、かつ、奥付で「嘉永七年甲寅七月二十八日写了 栗田寛」と、書写した時期と人物がはっきり分かることである。会沢の生前に書写したことが判明する写本はこれのみである。次に、栗田と会沢のつながりをあげることができる。栗田は天保六年（一八三五）に生まれ、のちに『大日本史』編纂に携わりこれを完成させた人物で、嘉永三年（一八五〇）には「会沢正志に就きて、論語・書経の講義を聴<sup>(6)</sup>」き、同五年には「新論」を「以正志<sup>(7)</sup> 齊先生所手書之書写之了」とあるように、会沢に近侍した弟子であり、史料としての信頼性が相対的に高いであろうと判断したことによる。なお、本書の外題は「千島異聞」とあるが、内題は「千嶋異聞」となっている。また、本書には「ロシヤ易姓」（本文一四頁上段一〇行目）と「關土聚民之術」（本文一一八頁下段一四行目）という、二つの頭注がある。

註

(1) 著述年代については、すでに「千島異聞」考（『日本歴史』一九八七年六月号）および、「新論」以前の会沢正志齋をめぐって（『同右』一九九〇年七月号）で論じている。従来の享和元年（一八〇一）説の背景・内容、文化三十五年説の根拠については、これらを参照されたい。

本稿はこれらの二論文および「新論」以前の会沢正志齋―註解『諸夷問答』―（『東京都立大学法学会雑誌』第三〇巻第一号、一九八九年七月）と、内容に重複する部分があることを、あらかじめお断わりしておく。

なお、本稿は「解題」として必要な範囲で「千島異聞」の内容に触れるにとどめた。その分析を全面的に行なうことは既に前掲拙稿ですませたことでもあり、ここで意図するものではない。

(2) 「研究史」については、前掲「千島異聞」考（四五頁、「新論」以前の会沢正志齋をめぐって）八四頁を参照されたい。なお、そこで触れなかったものに、荒川久壽男「宇内の大理」（四海書房、一九四四年）がある。ここでは寛政三年まで記載のある写本を用いて、主に「新論」との連関（思想的発展）と「ロシアに関する資料提供」が分析されており、享和元年説が採られている。最近の研究では、水代勲「会沢正志齋著『千島異聞』について―享和元年成立説への疑問―」（『水戸史学』第三一号、一九八九年一月）がある。そこでは「辺要分界図考」「訂正増訳采覧異言」の二書の「千島異聞」への影響と「千島異聞」の成立年代が論じられ、後者については「取り敢へず『千島異聞』の成立は〔中略〕享和元年説のやうな文化元年以前にはあり得ないといふことである」（六一頁）とされる。

また、木崎良平は「光大夫とラクスマン―幕末日露交渉史の一側面―」（刀水書房、一九九二年）で、「著者不明の『千島異聞』二巻は、寛政三年（一七九二）までのロシア略史で、この頃〔前後の文脈から文化元年頃を指す〕に成ったものと思われる」（二三九頁）と記している。「研究史」の現状を物語っているといえよう。

(3) 前掲、「千島異聞」考、四九頁。

(4) 大石慎三郎は「和蘭風説書」「別段風説書」の内容は〔中略〕、全く完全な幕府の独占物であると断言することはできぬが、やはり高度の極秘事項で、翻訳に従事した通詞ら数名と、あとは老中ら幕府の最高首脳部のみしかその内容は知らなかったこと、としてよいであろう（『大江戸史話』、中公文庫、一九九二年、一七八頁）としているが、会沢も眼にしていることは明白である。「諸夷問答」においても会沢が「和蘭風説書」を読んでいる場面が登場する（前掲、「新論」以前の会沢正志齋、二二二頁）。

(5) 「職方外記の文疑ふらくは誤写あらん」（本文一一〇頁上段一七行目）「此処脱語あらん」（本文一一六頁下段一七行目）「補ふへし」（本文一七頁上段七行目）「世伝見合へし」（本文二三頁上段二行目）「物故の事此間必脱誤あるへし」（本文二二六頁下段一二行目）の五つである。これらは書写者により書き加えられた注と考えてよいだろう。

(6) 「栗田先生年譜略」。ただし、引用は照沼好文『栗田寛の研究』（錦正社、

一九七四年、一八頁から。  
(7) 照沼好文前掲書によると(二五―六頁)、「中沢茂一氏所蔵の写本『新論』にあるという。